

---

# も く じ

---

発刊に際して……………	1
はじめに……………	2
I 研究の目的……………	4
II 研究の意義……………	4
III 研究の分野……………	4
IV 研究の経過と計画……………	4
V 研究の仮説……………	5
VI 研究の成果……………	5
VII 研究の内容……………	6
① 動物とのかかわり……………	6
・ 動物と遊ぶ楽しさから飼う喜びへ	
—児童の飼いたい動物を選べる学習活動を通して—	(第1学年)…………… 6
・ モルモットのゴマちゃんとかかわりで育つ児童	(第1学年)…………… 16
・ いろいろな小動物とかかわることで変わっていく児童	(第2学年)…………… 23
・ 虫, 虫, 虫, また虫	
—年間を通した生き物と子どもとかかわり—	(第2学年)…………… 29
② 植物とのかかわり……………	37
・ 朝顔のお父さんやお母さんになろう	
—情感を高め, 表現力を豊かにする工夫—	(第1学年)…………… 37
・ 花も, はっぱも, ねっこも大好き	
—年間を通した児童と植物とかかわり—	(第1学年)…………… 54
・ わたしだけの観察記録	
—児童の表現の発想に学ぶ観察記録の工夫—	(第2学年)…………… 64
・ ほくのだいこん, わたしのにんじん	
—植物の記録カードから児童の内面を読み取る工夫—	(第2学年)…………… 76
VIII 委員名簿……………	87

## I 研究の目的

児童の教材へのかかわり方を見つめ、一人一人のよさを見付ける指導法を探る。

## II 研究の意義

平成4年度から新教科生活科が実施され、児童の自発性、多様さを尊重し、一人一人のよさが発揮される授業が行われなければならない。しかし生活科は新教科であり、児童の教材へのかかわり方、感じ方、考え方など児童の活動の様子や特徴、児童の活動へ教師がどのように対応し、一人一人の児童の個性を生かした授業の指導法について、まだ明らかになっていない。

本研究は、児童の教材へのかかわり方や低学年の児童の特性を探り、一人一人の児童のよさを引き出す指導法を授業実践を通して明らかにしようとするものである。

## III 研究の分野

生活科 自然とのかかわり

## IV 研究の経過と計画

### 1 研究期間

2年間（平成3，4年度）

- ・ 第1年次（平成3年度）は、児童の動物とのかかわりに視点を当て、低学年児童の活動の様子や特徴を追求しながら、その中で育っていく児童の姿を明らかにしようとした。
- ・ 第2年次（平成4年度）は、児童の植物とのかかわりの様子、考え方や感じ方の特徴を追求するとともに、教師の指導・援助との関連を探ることをねらいとした。

### 2 研究計画

- ① H3.4 初顔合わせ，研究の概要計画
- ② 5 研究計画と方向について
- ③ 6 生活科の指導計画，学習指導案の作成
- ④ 7 児童の観察方法，指導と援助の方法について
- ⑤ 8 授業実践準備，記録の分析方法検討（文献調査）
- ⑥ 9 授業の実践
- ⑦ 10 授業の実践
- ⑧ 11 観察資料，記録の分析
- ⑨ 12 分析結果の考察

- ⑩ H 4. 1 分析結果の考察, 原稿執筆について
- ⑪ 2 研究1年次の1次原稿の検討
- ⑫ 3 2次原稿の検討, 次年度の計画
- ① H 4. 4 単元の設定等, 4年度の計画
- ② 5 学習指導案の作成と検討, 授業実践
- ③ 6 学習指導案の作成と検討, 授業実践
- ④ 7 授業実践
- ⑤ 8 記録の整理, 分析, 考察
- ⑥ 9 授業実践(1学期の継続)
- ⑦ 10 授業実践(1学期の継続)
- ⑧ 11 授業記録, 資料の分析
- ⑨ 12 1次原稿提出
- ⑩ H 5. 1 2次原稿提出
- ⑪ 2 原稿提出
- ⑫ 3 まとめ

## V 研究の仮説

児童の活動を見取り, 児童の考えや願いを尊重した指導や援助を行うことによって, 児童は自らの活動に意欲的に取り組むことができる。

## VI 研究の成果

生活科の授業における児童の動植物へのかかわり方, 考え方, 感じ方の特徴とその指導・援助のあり方について次のことが明らかになった。

### 1 動物とのかかわり

- ① 児童が動物を身近なところで飼育することにより動物が自分たちと同様に生きていることに気付く。そして, それは児童特有な見方を含んでいる。また, 年間を通した飼育活動から児童は動物の特徴だけでなく友達のよさにも気付き, 他を思いやる心情が育つ。
- ② 虫などを探す活動では, 児童は自分たちの周囲から地域へと活動を広げ, 生き物への関心を深め, 自分たちの課題を自ら解決していこうとする態度を育てることができる。

### 2 植物とのかかわり

- ① 低学年の児童は自分の育てる植物を擬人化してとらえる傾向がある。また, この心情を大切にされた指導・援助を行うことにより, 植物が生命を持っていることや植物への親しみを増

し、植物を大切に扱おうとする態度を育てることができる。さらに、植物を育てるだけでなく、植物を利用した活動を取り入れることにより児童の植物への愛情や親しみが増す。

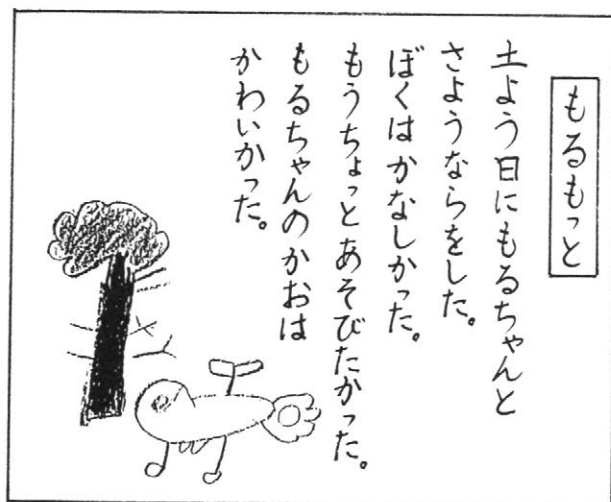
- ② 児童の発想を生かした記録方法で植物の成長を記録させることにより、記録を楽しみながら書くことができ、植物についての気付きや植物を大切にしている心情を深めることができる。また、児童自らの活動を振り返らせることができる。
- ③ 児童の観察カードの分析から、植物の生態や成長への気付きを多く記述する児童、友達とのかかわりや植物への心情を多く記述する児童があり、児童によって特徴があることが分かった。このことをもとに一人一人の児童に合った具体的な指導・援助を行うことができる。

## Ⅶ 研究の内容

### ① 動物とのかかわり

- 動物と遊ぶ楽しさから飼う喜びへ

——児童の飼いたい動物を選べる学習活動を通して——



#### 1 研究のねらい

これは、N男がモルモットの世話をしている時に書いたカードと国語の学習での詩である。N男は動物が苦手だと言って、教室の隅でじっとしていた児童である。いくら勧めても、動物の側にも来なかった。日頃の元気な姿からは思いもよらないN男の姿であった。しかし、動物と遊ぶ機会を増やすにつれて、モルモットに触れるようになっていった。モルモットへの思いが高まっていった様子、そしてクラスの児童がモルモットをかわいがる様子を見てうらやましくなるN男の心のつぶやきに驚かされた記録であった。

本研究は、動物を飼うことによって、大人とは違う児童の動物への気付きやとらえ方を見付け、さらに児童の見せる動物への思いや友達とかかわる姿を求めたものである。

## 2 研究の内容と方法

(1) 単元名 第1学年 「小さな仲間たち」

(2) 単元の目標

- ・ 動物に親しみを持ち、それを大切にする。
- ・ 友達と協力して学校で飼っている動物の世話をする。
- ・ 世話をすることを通して、動物が自分たちと同じように生命を持っていることに気付く。

(3) 指導計画 (12時間扱い)

○内数字は授業時間数

小単元	活動名	主な活動	留意点
1 学校の動物と仲よくしよう	動物に会いに行こう ①	○動物を飼育舎から出して(飼育舎に入って)動物を見たり、触ったりする。	・ 飼育舎に入った時の児童のつぶやきを聞き取る。 ・ 抱き方を教える。
	動物と仲良しになろうⅠ ①	○動物と仲良しになるために何をしたいかについて話す。  ○動物と遊ぶ。 ・ 餌をやる、触る、抱く	・ 動物が喜ぶことを発見させるようにする。 ・ 情報を知らせたり、動物の扱い方を教えたりする。
	動物と仲良しになろうⅡ ①	○前時と同じ	・ 活動を通して動物を大切にする気持ちを持たせるようにする。
	動物と遊んだことを知らせよう ①	○動物と一緒に遊んで楽しかったことや、初めて知ったことなどを自分の方法で表現する。 ・ 絵や作文に書く、話す ・ 形や動きをまねる等	・ 前時に続いた活動にする。 ・ 表現の方法をいくつか示し、子どもからも出させ方法を選ばせる。

<p>2 □□を飼ってみよう</p> <p>※□□は、児童の選んだ動物</p>	<p>□□を教室で飼ってみよう ①</p>	<p>○教室で飼ってみたい小動物を何にするか決める。</p>	<p>・飼育委員会と連絡をとる。</p>
	<p>飼う準備をしよう ③</p>	<p>○小動物を教室に連れてきて一緒に遊びながら、飼う準備について話し合う。</p> <p>・餌や家をどうするか</p>	<p>・家作りは、準備するものも話し合う。</p> <p>・材料を集めるのに必要な時間をとる。</p>
	<p>□□を迎えよう ①</p>	<p>○前時に話し合ったことをもとに準備にとりかかる。</p> <p>・家、飾り、当番表を作る</p>	<p>・飼える日数を知らせる。</p> <p>・道具の使い方を説明しておく。</p>
	<p>□□の世話をしよう (常時活動)</p>	<p>○小動物の迎え方を話し合う。</p> <p>・飼育委員会のお兄さん、お姉さんに大切に飼う気持ちを伝える。</p> <p>・歌を歌う</p> <p>・名前をつける</p>	<p>・歓迎会の計画を話し合う。</p> <p>・飼育委員会の子どもに動物を連れてきてもらい、大切に飼おうとする気持ちを高めるようにする。</p>
		<p>○当番の仕事をする。</p> <p>○朝の会か帰りの会で気付いたことを発表する。</p>	<p>・常時活動をしながらか、気付いたことや活動の様子やつぶやきなどを紹介するようにする。</p>
		<p>○みんなに知らせたいことや動物にしてあげたいことなどを書いて掲示する。</p>	<p>・掲示板に□□コーナーを設ける。</p> <p>・世話をしながら出てきた問題は学級会の時間や朝の会、帰りの会で話し合うようにする。</p>

3 □□を飼育舎に返そう	□□の喜ぶことをしようⅡ ②	<p>○常時活動の様子を振り返る。</p> <p>○飼育舎に返すために動物を喜ばせる計画をたてる。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・餌をやる（ご馳走作り）</li> <li>・家の掃除</li> <li>・飼育舎の掃除</li> <li>・動物を遊ばせる</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・いろいろな活動を子どもたちが分担することで、気持ちを表すことにつながることを知らせる。</li> </ul>
	□□の喜ぶことをしようⅡ ①	<p>○自分の役割、仕事を確認し活動を決める。</p> <p>○今まで飼っていた動物を飼育舎に入れ、お別れをする。</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・それぞれの仕事の様子を見て回り、仕事の終わったところは、まだ終わっていない友達の手伝いをする。</li> <li>・子どもたちがつぶやく言葉を聞き取る。</li> <li>・飼育舎の外からのぞき、子どもたちそれぞれが別れの気持ちや、友達とのかかわりが出せるように時間を十分にとる。</li> </ul>
4 □□のことを知らせよう	お手紙を書こう	○今まで飼っていた動物のことを知らせる手紙を自分の知らせたい人を書く。	・国語の作文指導として扱う。

### 3 授業実践

#### (1) 大人と違う子どもの気付き

##### ① 遊園地を作ってあげると動物たちは喜ぶよ

T：(動物と遊んだ後) 今日とはとっても楽しかったのね。この次に何をしたいか友達とお話  
してきましょう。

C：積木のお家とかを作ってあげる。

C：迷路を作って遊ばせてあげる。

C：ウサギの遊園地。

C：遊園地がいい。

初めて動物と遊んだ後の児童の思いである。(動物にとって楽しいことではなく)自分が楽しかったことや、楽しみたいことを動物に投影して考えている。この後、児童は段ボール箱を持ち寄り、遊園地を作り始めた。

おばけ屋敷を作った児童は、つなぎ合わせた段ボール箱の中に自分が入って、「こうやって、暗い所に行くの。」とウサギになったつもりで話していた。

家を作った児童は、水のみ場を作り、明るくするために窓を作っていた。「家からお城へ」と考えをふくらませるグループもあった。

自分たちで作った遊園地や家に動物たちを入れてみると、動物が思うように動いてくれないことに気付いた。そのことを児童は様々に解釈している。



段ボール箱をつなげた遊園地にウサギを入れた児童のグループは次のように話していた。

C：ウサギが喜んでる。

C：日陰が好きなんだよ。だから、ここばかりいるんだよ。

C：じゃあ、ここに屋根を作ればいいんだよ。

C：あついんだよ。

C：ぼくもそう思うよ。

(中略)

C：ウサギさんに人参のにおいをかがせると来るんだよ。

C：ふるえているよ。

C：寒いんだよ。

C：違う、あついんだよ。

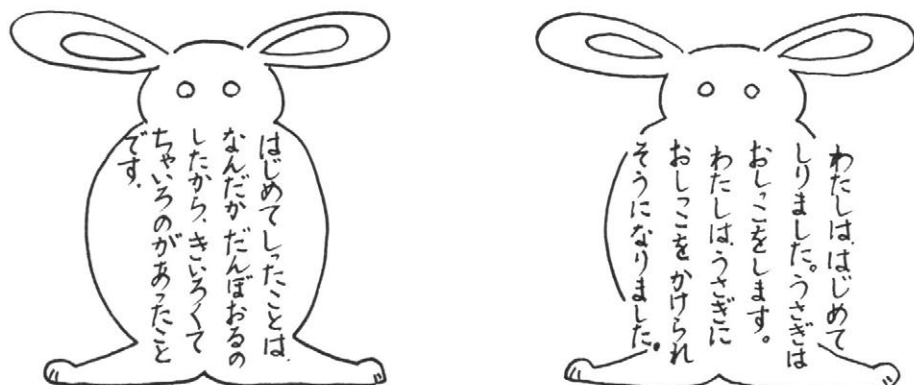


C：日陰だよ，ここは。だから寒いんだよ。

C：私はあつい。

このように，児童は自分が感じることを動物たちも同じように感じていると受け取っている。

## ② なんだか黄色くて茶色のもの



これは，児童がカードに書いた内容である。動物たちと遊んでいるときにも，児童は動物が糞や尿をする場面に出合った。しかし，児童は「きたない」と言いながらも，遊びに夢中で，それほど注意して見てはいなかったようである。

また，教室で飼う動物の相談をしているとき，ニワトリと遊んだ児童は，ニワトリがたまたま排泄しなかったのにもかかわらず，「ニワトリはオシッコやウンチをしないから教室で飼える。」と考え，ニワトリを飼うことを強調していた。

しかし，実際に動物の世話を始めると，糞や尿の始末が児童の仕事となってくる。段ボール箱の小屋が濡れていることに気付いても，なぜ濡れたか分からない児童もいた。「水がこぼれちゃってるよ。」「なんで段ボールが濡れてるの?」などと言う児童に対し，ウサギの尿であることを知っている児童も確信は持てず，やや遠慮がちに教える場面があった。また，ニワトリの世話をした児童も，「飼育小屋は臭いです。」「ニワトリはウンコをします。ちがうところのりとまたしました。」とカードに記していた。

児童は，動物の世話をすることで動物も糞や尿をするを知り，自分と同じように生きていることを実感した。

## ③ タマネギをおいしそうに食べるよ

ウサギの食事は人参やキャベツ，モルモットは野菜，ニワトリは青菜という感覚を児童は持っている。ある日，タンポポの葉をとってきた児童が「ウサギさんにあげるんだ。食べるんだって。」と聞いてきたことを皆に知らせた。このことにより，餌に対する固定的な考えが少し崩れたようである。さらに，動物の世話をすることにより，児童は世話をする動物が何を食べ

るか本で調べるようになった。

モルモットにチーズ、ウサギにパンやさつまいも、なす、さらにニワトリにさつまいもやタマネギをやるようになった。タマネギについては、児童が自分で冷蔵庫の中から見付けて持って来たもので、同じグループの児童も初めは食べるかどうか分からずやってみた。教師もニワトリはタマネギを食べないだろうと思っていたが、よく食べることを児童から教わった。児童は、動物の餌の種類を自分たちで見付けていった。

#### ④ 色紙で飾った方が喜ぶよ

児童はウサギとモルモットの家を段ボール箱で作った。ウサギの家は、小さな箱をつなぎ合わせ、餌を食べる部屋と寝る部屋とを作り、中に色紙を貼って飾ったものである。「ウサギさんがきれいになって喜ぶよ。」と言って満足していた。ウサギが軽々と跳び出てしまいそうな高さで、ウサギが入って背中が隠れるくらいであった。案の定、ウサギを家の中に入れても外に出てしまったため、児童は次の日には、装飾をせず、箱の中に入れることにした。糞や尿で汚れるため、いくつも箱を用意しなくてはならなかった。たびたびウサギが逃げ出すため、だんだんと大きな箱を用意するようになっていった。

モルモットの家は、段ボール箱の中にビニール袋を敷き、ふたに明かり取りと空気穴のために、セロハンテープで網目を縦横に貼り、窓にした。しかし、この家もモルモットにとっては小さく、自由に動けなかった。児童は、ふたを開けるとあばれるモルモットを元気な証拠ととらえ、箱の中でじっとしている状態をあばれなくておりこうだととらえていた。二つ目の家は大きい箱を見付けて来て、同じように作った。モルモットが大きな家の中で走るのを見て、大きい方が良いことを知った。

児童の考える家は、動きのことや尿のことを考えているものの、動物が入れば良いと考えていたようであった。実際に動物を入れて飼ってみて、初めて気付いて改良していった。

#### (2) 心を育てる生き物とのかかわり

##### ① 動物を大切に作る気持ちの表れ

##### ア. モルちゃん逃げちゃだめ

T：動物と仲良しになるためには、どんなことをしてあげると良いと思う？

C：遊んであげる。

C：餌をあげる。

C：優しくしてあげる。

C：だっこしてあげる。できるもの。

C：なぜなぜしてあげるの。



T：そう、餌をもらったり、なぜなぜしてもらったりしたら、動物たちはどんな気持ちになる？

C：うれしい。

C：たのしくなる。

初めて動物とかかわるときの児童の反応である。動物を大切にしなければいけないことを頭では知っている。しかし、実際には児童は、持って来た餌をウサギの口に持っていき、ぎゅっとつかんで逃げないようにし、無理やり食べさせようとする。ウサギがキャベツを食べると、児童は目を輝かせて、ウサギを追いかけ、「ほら、どんどん食べ。」とさらに食べさせようとしていた。

また、ウサギと追いかけてっこをしたり、ウサギを中心にしてかごめかごめをしたりして、動物を自分と同じ仲間として接していた。遊んだあとのひとこと感想に、「私は、ウサギを持ってみたら、ウサギが勝手に動いたから、私たちも追いかけてみたら、なんか友達になったみたいですよ。」と書いていた。さらに、学級の3分の1の児童が動物に触れたことや抱くことができたことを喜び、記述していた。児童にとっては、動物のことよりも自分が満足することが大切なことであった。

イ。ぼくはニワトリ、わたしはウサギが飼いたい

「先生、動物を外に出してもいいの？」と児童が心配そうに尋ねる。児童は飼育舎にいる動物たちと遊びたいという気持ちを持っていたが、なかなか言い出せなかった。

日頃、触ることのできない動物たちに多く出会わせてやりたいと思っていたので、飼育舎にいる動物の全種類を児童の前に出してみた。動物たちとの出会いは、後の活動に大きく影響した。自分のかかわった動物に興味を持ち、さらに意欲を高めた児童、また、いろいろな動物に触れたいという希望を持った児童、そして動物が苦手と言い、かかわろうとしない児童など、それぞれが違った反応や行動を示した。

動物を飼う相談に入った時、児童の飼いたい動物は違っていた。教師の初めの考えでは、学級で1、2匹の動物を教室で飼うことであった。しかし、児童はそれぞれ自分の世話をしたい動物を主張し、譲らなかった。

C：ぼくは、ウサギがいい。だってしいんとしているから。

C：わたしはモルモットがいい。かわいいもの。

C：ぼくは、ニワトリがいい。ウサギよりもあばれないよ。

話し合っても、平行線であった。今、無理をして動物の種類を決めることがあるのだろうかという疑問がわいてきた。そして、できるなら児童の希望をかなえてあげたいという気持ちが強くなってきた。そこで、可能な範囲で世話をすることになった。ウサギ、モルモットは教室

での飼育が可能、ニワトリは飼育舎での世話が適当である。児童は、自分たちで世話をする動物への思いを強くしていった。

ウ. 死なないでね

動物の世話をすることにより、毎日毎日、餌を食べた量や糞尿の始末のこと、動物が元気であるか等々、動物の話題が多くなった。自分たちの世話をしている動物がかわいいという気持ちが一番強いが、飼育委員会から預かったという意識もあり、動物を病気にさせたり、死なせてはいけないという気持ちが感じられた。児童は、常時活動の記録に次のように書いている。

・ 餌をやるとき

C：モルモットが餌を食べてくれなくてもいいんだ。そのかわり死なないでね。

C：ぼくのにんじんを食べてくれてありがとう。

C：わたしが、とうばんで餌を持ってきて、朝あげて少したったら、もう餌が小さくなっていました。とてもはやかったです。きっとキャベツが好きなんだなあと思いました。

・ 抱いたり、動きを見たりしたとき

C：新聞紙をぱらっとおこしたとき、モルモットはゴソッと気持ち良さそうだったです。

C：ウサギを持つとき、良い持ち方と悪い持ち方があるみたいです。

・ 飼育舎に返すとき

C：ぼくは発見しました。積木（で遊ばせようとする）より、せせらぎがいいようです。

——せせらぎ（木や池や川のあるところ）につれていったところジャンプしたのを見て感じた——

C：わたしはモルモットのおうちを作りました。おうちは積木や段ボールで作りました。でも、モルモットは積木で作ったおうちの入り口にずっといて全然動きませんでした。野菜をいっぱいあげても全然食べませんでした。だから、そっとしておきました。

児童は、動物の気持ちになって考えられるようになり、行動できるようになってきた。自分本意な動物へのかかわり方から、動物を大事にし、かわいがろうとするかかわり方へと変わっていった。

② 生き物を飼うことを通して深まる友達とのつながり

ア. わたしが今日の当番

C：ぼくがニワトリのとうばんのとき、ぼくが土曜日に餌を忘れたから、Aさんに「月曜日にお野菜持って来てね。」と言われました。

この記録は、常時活動で、自分の当番を忘れてしまった時の児童のものである。児童同士のかかわりに友達を思う優しさが表れている。

ニワトリの世話をするグループは、一覧表を作り、餌を持ってくる順番を決めた。活動を始めると、餌を切る係を譲ったり、鍵を持ってくる係と餌を運ぶ係に役割を分けたりしていた。

モルモットとウサギの世話をするグループでは、餌を調べることと小屋を作ることに分かれて作業をしていた。

常時活動に入ると、餌やりをし、家から餌を持ってくるのを忘れたときは、草を探しに行くなどの行動が見られた。また、ニワトリはミミズを食べることを知らせると、休み時間に手を泥だらけにして友達と一緒にミミズを探す姿があった。

児童は自分たちで動物を飼うことによって、仲間と力を合わせることや動物の世話ができることを知り、さらに、友達に対する思いやりも育っていった。

#### イ. みんなでウサギを探そう

教室で飼っている途中、ウサギが逃げ出すことが3回あった。2回は教室内に隠れていたのだが、最後の1回は3日間見付からなかった。児童はまず、手分けをして、学校中の全学級や主事さんに見付けたら知らせてもらうようお願いに行った。さらに、児童の考えでポスターや餌を置く小屋作りをした。「ウサギが死にませんように。」と祈りながら、作業



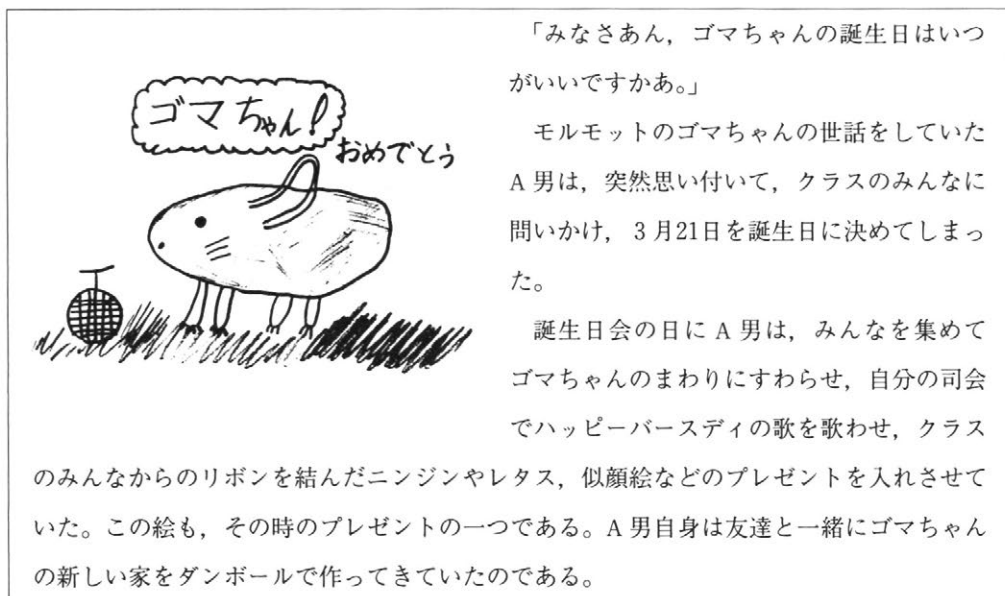
をすすめていた。ポスターを家の外に貼ってもらう、小屋は校庭に置き、餌をたくさん入れてウサギが食べられるようにしておく等、児童が知恵を出し合って考えていった。それだけに見付かった時の喜びは大きく、学級全員で一つのことをなしとげたという満足感を味わった。

#### ウ. 飼育委員会のおねえさんおにいさん、ありがとう

教室や飼育舎で動物の世話をするために、3週間飼育委員会の人をお願いをして世話をする約束をした。そのために、児童は飼育委員会の児童をお願いをした。飼育委員会の児童は、1年生に世話の仕方や気を付けることを教え、かわいがってほしいことを伝えた。その後、飼育委員会の児童は、預けた動物たちを心配して、休み時間に学級へ来て助言をした。児童は上級生の話聞き、世話の仕方を工夫したり、注意を守ったりした。また、ウサギ騒動では、学校全体で心配をし、探した。そのことが飼育委員会にとどまらず、他学年とのかかわりを深めた。

(港区立麻布小学校 茂木 三枝)

## ・ モルモットのゴマちゃんとのかわりて育つ児童



### 1 研究のねらい

上記のA男は、体格も大きく、日頃からわんぱくで、ちょっとしたことでも友達に手を出し、けがをさせることも度々であった。他の親からの苦情が続き、母親は困りきっていた。

しかし、一匹のモルモットの飼育を通して、A男は上記の例に見られるように自分の良さに気づき、生活者としての力を発揮するようになった。

生活科を実施するに当たり、「どんな動物を何匹くらい飼ったら、児童に十分なふれ合いができるだろうか。」などという話題が出される。

しかし、本研究では、たった一匹のモルモットを飼い続けることによって、児童が創意や工夫で活動を広げ、相互の交流を深め、生活を豊かにしていく姿を求めているのである。

### 2 研究の内容と方法

(1) 単元名 第1学年 「モルモットを飼おう」

(2) 単元のねらい

- ・ ふれあいを通してモルモットに親しみを持ち、友達と協力して世話をする。
- ・ 飼育活動を通して、一匹のモルモットの命をかがえのないものとして、みんなで大切にできる。

(3) 指導計画の作成に当たって

① 学校の飼育実態と行事との関連

校庭及び飼育小屋の改修工事のため、1年生児童は入学以来、小動物とふれ合う機会が持て

なかった。そこで、10月9日の社会科見学の目的地を千葉県市川市立動植物園とし、動物とのふれ合いコーナーで、ウサギ、モルモット、ヒヨコの抱き方を教わるなどの体験をさせた。

## ② 学級の児童の様子

日頃わんぱくで行動が粗暴と思われていたA男は、小動物にとっても興味を持っている様子であった。また、活発で落ち着きのないB子は、モルモットでもウサギでも平気で、嬉々として動物を抱きあげ、触れない子に持たせたり世話をしたりしていた。この二人のためにも、また動物好きなクラスの子もたちのためにも、学校で小動物と十分にふれ合わせる機会を作りたいと考えた。しかし、アレルギー性の喘息を起こしやすく動植物園ではマスクをし、動物とのふれ合いの時には離れたところからみんなの様子を眺めていたC子には配慮が必要であった。

## (4) 飼育までの経緯

### ① 教師による事前の準備

○学年会（10月3日）で小動物の飼育（方法、場所、種類と数など）について話し合う。

- ・動物と日常的にふれ合わせたい。（飼育が簡単でおとなしいもの）
- ・衛生を考えると、教室内での飼育はさせたくない。
- ・アレルギー性の喘息を起こしやすい児童については保護者と連絡を取り合う。

○モルモットの入手

- ・都立教育研究所から2匹のモルモットをもらってくる。（10月15日）
- ・生後3カ月のオスとメス、人になれていないので、落ち着きがない。

○事前の飼育（10月16日～23日）

- ・嘔まないかどうか
- ・逃げ足の素早さ
- ・餌は何をどのくらい用意したら良いか
- ・糞などの始末の仕方

○アレルギー性喘息のある児童の家庭との連絡、相談（10月21日）


家庭から

- ・ウサギの毛でもアレルギー反応が強く出ているので、飼うのはかまわないが、触らせた  
り当番をさせたりしないよう要望される。


担任から

- ・廊下での飼育とし、教室内に持ち込まない。
- ・毛などが残らないよう清潔に気を付けて飼育する。
- ・アレルギー体質や喘息について、他の児童に十分に理解させた上で、この児童には当番などを割り当てないことを約束し、飼育についての理解と了承を得た。

## (5) 指導計画及び経過

活動名	活動の様子	教師の援助
モルモットとの出会い	<p>○モルモットとの出会い(10月24日)  「先生、廊下になにかいる。」  「ウサギみたい。先生廊下にウサギがいる。」などと大騒ぎ  「先生がうちからつれてきたんだよ。」と説明。児童は、掃除中にも給食時間にも、代わる代わるのぞきにきては、触ったりしている。</p> <p>○飼育のお手伝い  翌日からは、餌やりや水そう洗いなどの仕事を手伝ってくれたりしている。</p> 	<ul style="list-style-type: none"> <li>・予告なしの出会いにした。</li> <li>・C子の親との約束について話して、児童に協力を求める。</li> <li>・児童がやれるように、餌を用意しておく。</li> <li>・A男、B子も含めてどの子でも手伝えるように配慮した。</li> <li>・給食室から野菜くずをもらえるように依頼した。</li> </ul>
モルモットを飼おう	<p>○学級会「モルモットをクラスで飼うかどうか」  (10月29日)</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・クラスとして飼うかどうか</li> <li>・飼うときどんなことに気をつけるか</li> <li>・土曜や日曜の餌をどうしたらいいか</li> <li>・世話はだれがするのか</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・A男が飼いたい気持ちになっていることを確かめて、学級会を開く。</li> <li>・喘息気味のC子に対する配慮ができた児童をほめる。</li> <li>・遊びたいが世話をしたくない児童には「じゃあ、遊ぶのも生き物係だけでいいのかな。」と助言する。</li> </ul>



<p style="writing-mode: vertical-rl;">モルモットの世話をしよう</p>	<p>○世話の開始(10月30日)</p> <p>生き物系の児童が世話の仕方をよく覚えて、当番の児童を手伝いながら教えてあげている。餌やりを忘れて生物の係に注意されている班もあった。</p> 	<ul style="list-style-type: none"> <li>・世話の仕方の手順を廊下に図示しておく。</li> <li>・「□□の世話の仕方」と名前の部分は、わざと抜いておく。</li> <li>・初めての世話なので、説明図を読ませながらさせる。</li> </ul>
<p style="writing-mode: vertical-rl;">モルモットに名前をつけよう</p>	<p>○学級会「モルモットに名前をつけてあげよう」 (11月19日)</p> <p>モルちゃん、ナナちゃん、じゅん君、ゴマちゃんなど、多くだされた中から、可愛いからという理由で「ゴマちゃん」に決まる。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・命名式 「□□の世話の仕方」のところに「ゴマちゃん」と入れる。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・A男、B子たちが世話をしながらそれぞれの呼び方をしていることをとらえて、学級会の議題にする。</li> <li>・決まってすぐに廊下の飼育場所へ移動して、みんなの前で、名前を書き込む。</li> </ul>
<p style="writing-mode: vertical-rl;">ゴマちゃんを助けよう</p>	<p>事件の発端</p> <p>ゴマちゃんを校舎の裏庭へ連れていき、遊ばせていた。ちょっとしたすきにゴマちゃんが下水につながる横穴へ入り込み、出てこなくなってしまう、大騒ぎになった。</p> <p>○臨時学級会「ゴマちゃんを助けよう」</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・事件の経過報告 (D男)</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・やりたい子は大勢いたが、いつも世話をしている A男や B子が扱いのうまさでまかされた。</li> </ul>

	<ul style="list-style-type: none"> <li>・救出作戦……餌による横穴からのおびき出し</li> <li>・役割分担を決める</li> </ul> <p>餌でおびき出し、穴をふさぐ…… A 男</p> <p>逃げないうちに捕まえる…… B 子・E 子など</p> <p>○時間内の救出作戦は失敗に終わった。しかし、A 男、B 子ら十数名は下校後に再度試み、土に埋まっていた下水栓の蓋を外し、穴に落ちそうになっていたゴマちゃんを B 子が片手で捕まえ救出することができた。</p> <p>翌日クラスのみんなに報告し、喜びあった。</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ A 男や B 子たちの活躍を認め、子どもたちの人選が良かったこともほめた。</li> </ul>
<p style="writing-mode: vertical-rl; text-orientation: upright;">世話 冬休み 中 の ゴマ ちゃん の 話し 合 い</p>	<p>○学級会「冬休み中のゴマちゃんの世話について話し合おう」</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 誰が世話をするのか</li> <li>・ もし、万が一死んでしまったら責任はどうするのか</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 休み中にあずかれるかどうか、前もって家の人と相談してくれるように言っておいた。</li> </ul>

### 3 授業実践

#### (1) 創意で広がる活動

##### ① モルモットへの関心

児童のモルモットへの関心は初めから高かった。飼育用の水槽をのぞきこみ、餌を落とし込んでみたり、「モルモルちゃん、食べな。」などつぶやきながら手に持って食べさせたりしていた。餌やりの順番のことでけんかも起こっていた。

また、水槽の下に敷いていた新聞紙を食べているのを見付け、驚いて「先生、大変。モルモットが新聞を食べているよ。」と報告に来たり、「先生、モルモットがおかしい。卵を産みそう。」「だって、じっとして動かないんだもの。」など、水槽を抱えて職員室に走り込んで来たりした。

##### ② 仲間としてのふれ合い

慣れてくると、天気の良い日の休み時間など、水槽ごと外に連れ出し、草地に放して追いかけっこをしたり、すべり台の上から滑らせてあげたりし始めた。鉄棒にもつかまらせたりしていた。

またある日の放課後には、「先生、絵を描く紙を下さい。ゴマちゃんを描くの。」「ほくにょ。」と、絵を描き始めた。「あっ。ゴマちゃん、指4本しかない。」「後ろは3本しかないよ。」

「つめもあるね、同じだ。」など、ふれあいの中からもいろいろなことを発見した。この時の絵は、ゴマちゃん似顔絵コーナーを作って掲示しておいた。

給食でプチトマトが出た時も、「ほくの分を一つあげるね。」と試したり、パンを分けてあげたり、牛乳を皿に入れて飲ませようとしたり、自分の仲間としてかわいがり様子が見られた。

### ③ 一匹でも十分なふれ合いの機会

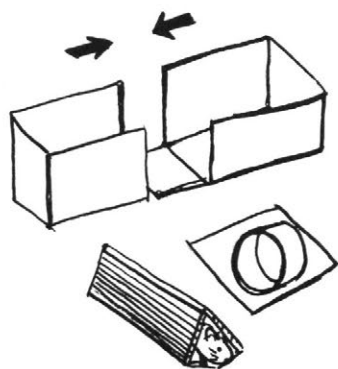
児童 (男子)	ごまちゃんがすきですか					ごまちゃんにどんなことをしてあげましたか◎○△										ごまちゃんにうんちがおいしかった			
	すくすき	まあすき	きでない	あまりない	きらい	なぜた	えさをあげた	もった	だいた	あそんだ	のうんちまつ等	水そう	あらい	その他	じぶんとた	た友だちだに	見ていた	うにまけた	
①	○					◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎			○				
②	○					◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	とけた	○				
A男	◎					◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	おけし	○				
④	○					◎	◎	○	◎	○	△	○	外に熱	◎					
⑤	○					◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎			○				
⑥	◎					◎	◎	◎	◎	◎	○	○	かめた	◎					
⑦	○					○	○	△	△	○	△	△	外に熱	○	○				

平成3年12月20日(金)実施

上の表に見られるように、どの児童でも、一匹のモルモットを飼い始めて1ヶ月間で様々なかかわりを持つことができています。しかし、児童はもともと糞の始末などきたくない仕事はやりたがらない。学級会でも「係や先生がやればよいと思う。」「やりたい人がやればよい。」などの発言さえ見られる。しかし、これらの仕事を係まかせにしてしまっただけでは、せっかくのふれ合いの機会も生まれません。そこで、「では、遊んだりかわいがったりするのも先生や係だけでいいんですね。」と質問し、自分たちで世話をしようという意欲を持たせることができた。

### ④ 家や遊び道具作りに見られる自発的な工夫

ゴマちゃんは、プラスチック水槽で飼われていた。3学期になったある日、A男は給食室から段ボール箱をもらってきて、ゴマちゃんの家にした。そして、その中に昆虫用のプラスチック



水槽を入れて、「ゴマちゃんの部屋ができた、これなら寒くならないよ。」と飼い始めた。また、一週間ほどすると「これをつないで部屋を広くするの。先生カッターナイフ貸して。」と、また段ボール箱を持ってきた。そして、大きくなった家を掲げて、クラスの仲間に「ゴマちゃんの家が大きくなりましたあ。見て下さい。」と示した。さらに、段ボールの切れ端で屋根をつけようとしたり、ガムテープの芯を台紙につけてゴマちゃんの道具を作っ

たり、段ボールを折りたたんで隠れ家を作ってあげたりしていた。

(2) 自分の良さに気づき、生活者として力を発揮した A 男たち

① ゴマちゃんの世話を通して友達から認められた A 男

生き物係になった A 男も、クラスで世話を始めた頃には、餌やりはできてても糞の始末はできなかった。また、ゴマちゃんのことを一人じめして、他の児童から「A 男君がぼくに餌をやらせてくれない。」などと言われていた。そこで、「生き物係は、当番の人がうまくできないときにやり方を教えてあげたり手伝ってあげたりするんですよ。」と助言しながら様子を見た。すると、当番の班が何班かわかるように小黒板に毎日書いてあげたり、友達が嫌がっている時には手伝ってあげたりするようになった。その結果、2 学期末のアンケート調査の結果では、A 男に対する信頼度が以下のように高くなっていた。

<p>・ ゴマちゃんの世話の時教えてくれた人、 手伝ってくれた人はだれですか</p> <p>A 君……………25人</p> <p>D 君……………14人</p> <p>E さん……………2人</p> <p>F 君……………1人</p> <p>∴</p> <p>N さん……………1人</p>	<p>・ ゴマちゃんの世話が上手な人は だれですか</p> <p>A 君……………22人</p> <p>B さん……………11人</p> <p>D 君……………7人</p> <p>E さん……………2人</p> <p>G 君……………1人</p> <p>H 君……………1人</p>
---	---

また、友達からの信頼が高くなるにしたがって A 男の暴力的な傾向も影をひそめるようになり、行動に自信が見られるようにもなった。そして、冬休み中の世話について話し合った時に、立ち上がって「ゴマちゃんのこと困ったことがあったら何でもぼくに言って下さい。」と言えるまでになった。

3 学期になって係が変わってからは、また乱暴な傾向が見られ始めたので、ゴマちゃんにかかわってもいいことを教えた。そして、ゴマちゃんの家づくりや誕生日会をしながら、自分の良さを取り戻し、安定してきた。

(江戸川区立下鎌田西小学校 手島 利夫)

## ・ いろいろな小動物とかかわることで変わっていく児童

私はいままでしたことは、そっと、ちょっと、ミカンの葉を取り替えたことです。虫は可愛くて、不気味そうです。私は、虫を飼ってみてよかったです。それは、虫が「早くチョウチョになりたいよう」と言っていて、私たちに「早くならしてよう」と言っているような気がするからです。虫は長生きしないから、一生懸命に育てました。それと、青虫はすぐに茶色のさなぎになってしまいました。私は、頑張り、最後まで飼いたいと思います。赤ちゃんの時と今は違うということがわかってよかったです。

### 1 研究のねらい

上の作文は、2学年「生き物を飼おう」における、A子の活動中の感想の一部である。自分たちで探したい生き物を決め、探しに行く場所、持ち物、探検の約束を決めて活動が始まった。そして捕まえ、飼い続ける途中、変化や成長の様子に気づき、大切に育てようという気持ちが高まっていったことがわかる。

児童は、様々な生き物に興味を示し、触れたり、捕まえたりする。しかし、個々の児童によっていろいろな感じ方やかわりの持ち方があろう。そうした個々の児童に対して、教師の適切な助言や援助が大切だと思われる。そのため、教師側で個々の児童の行動や考えの深まりを十分にとらえていくことが大切である。

本研究では、児童自身が選んだいろいろな虫を飼育し、かかわる中で、児童がどのような思いを持って活動し、変わっていくのか探してみたいと考えた。

### 2 研究の内容と方法

(1) 単元名 第2学年 「生き物を飼おう」

(2) 単元の目標

- ・ 身近にいる生き物を飼う。
- ・ 生き物の成長の様子や変化の様子に気付く。
- ・ 生き物への親しみをもち、大切にする。

(3) 指導計画（11時間扱い）

○内数字は授業時間数

単元名	学 習 活 動	教 師 の 援 助	評 価
	○校庭で生き物を探そう① ・ 校庭で生き物見付けをする。 ・ 捕まえた生き物を見せ合う。	・ 児童が捕まえたいような小動物を提示する。 ・ 短時間にしておき、生き物をもっと探したいという児	行動観察 ・ 学校内の小動物に関心を持ち、進んで捕まえよ

<p>一次 生き物を見付けに行こう ②</p>	<p>○生き物を探す計画を立てよう ①</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・探しに行く場所、探したい生き物を話し合う。</li> <li>・探したい生き物別にグループをつくる。</li> <li>・計画を立てる。 持ち物と分担 探検の約束やきまり</li> </ul>	<p>童の声にうなづく。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・学区内で探すという条件を伝える。</li> <li>・生き物を探しに行く前に捕まえてきた生き物をどうするのか考えさせ、飼い続けていけるように励ます。</li> <li>・安全に気付いている児童をほめる。</li> <li>・学年全体の活動とし、目的地別に引率一人がついていけるように、目的地も絞って考えるように促す。</li> </ul>	<p>うとしていたか。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・生き物探しに必要な用具を自分で考えることができたか。</li> <li>・目的地まで安全に行くための約束や決まりを友達と話し合うことができたか。</li> </ul>
<p>二次 昆虫館・水族館を作ろう ⑨</p>	<p>○生き物を探しに行こう②</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・計画にしたがって、グループごとに探しに行く。</li> <li>・捕まえた生き物を見せ合う。</li> </ul> <p>○生き物の世話をしよう②</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・飼い方について話し合ったり、教え合ったりする。</li> <li>・飼いかたの分からないところを家の人に聞いたり、図鑑などで調べる。</li> <li>・材料を用意して生き物の住みかを作る。</li> </ul> <p>○昆虫館・水族館を作る計画を立てよう ①</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・昆虫館・水族館で何を紹介したいか話し合う。</li> </ul>	<p>・安全のため、必ずグループ行動をするように注意する。</p> <p>・飼うことの難しいと思われる生き物については逃がすように助言する。</p> <p>・児童が他に飼いたい生き物を持ってきてもよいことを伝える。</p> <p>・自分で調べられた児童をほめる。</p> <p>・生き物の生態に合わないと思われる住みかでもすぐに指導してしまわずに見守る。</p> <p>・どんなことを友達に紹介すれば飼っている生き物について分かるか考えるように促す。</p>	<p>行動観察・自己評価</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・学区内で生き物を捕まえることができたか。</li> <li>・必要な用具をそろえることができたか。</li> <li>・目的地まで安全に歩くことができたか。</li> </ul> <p>作品</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・捕まえた生き物が住みやすいように工夫したか。</li> </ul> <p>行動観察</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・生き物の世話を進んで行っているか。</li> </ul> <p>発言</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・自分の飼っている生き物を紹介する昆虫館水族館を進んで作ろ</li> </ul>

<p>○昆虫館・水族館を作る準備をしよう ④</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・グループごとにコーナーを設け、準備をする。</li> <li>・招待する人を話し合う。</li> <li>・招待状を作る。</li> <li>・全体で必要な仕事を話し合い、分担して用意する。</li> <li>・見学の順番を決める。</li> <li>・前半、後半のグループに分かれて見学をする。</li> <li>・後片付けをする。</li> <li>・反省会をする。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・グループごとに発表の仕方を練習し、意見交換をさせることで、自分たちの発表を修正できるように促す。</li> <li>・意図的に交流の場を設ける。</li> <li>・世話をしてきた過程で気付いたことを友達に教えるように促す。</li> <li>・見学中は、友達のよいところを見付けるように助言する。</li> <li>・自分が生き物を飼っていくことで気付いたことや、できるようになったことを振り返るように促す。</li> </ul>	<p>うとしているか。</p> <p>行動観察</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・飼っている生き物を紹介する準備を友達と協力してできたか。</li> </ul> <p>作品</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・成長や変化の様子をまとめることができたか。</li> </ul> <p>発言</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・飼っている生き物の変化や成長の様子について気付いていたか。</li> <li>・自分と同じように成長していることに気付いたか。</li> </ul>
---	--	---

### 3 授業実践

単元に入る前に、飼ってみたい生き物と捕まえたい生き物についてアンケート調査を行った。そして、次のような結果が現れた。

飼ってみたい生き物 (23人中)

コオロギ	10人	モルモット	4人	ウサギ	4人	スズムシ	2人
リス	1人	イモリ	1人	カブトムシ	1人	ハサミムシ	1人
ザリガニ	1人	テントウムシ	1人	カエル	1人	バッタ	1人

捕まえたい生き物

コオロギ	10人	シャクトリムシ	4人	ウマオイ	4人	カマキリ	2人
ハサミムシ	1人	テントウムシ	1人	スズムシ	1人	チョウ	1人
カエル	1人	バッタ	1人				

今までの飼育の経験や興味の対象が一人一人違うことから、いろいろな生き物の名前があがってきた。児童の話し合いの中から、アオムシ・チョウグループ、バッタグループ、カタツム

リ・ナメクジグループ、コオロギ・バッタ・スズムシグループ、カマキリグループの5つのグループに分かれてそれぞれ飼育していくこととなった。また、各自が飼いたいという生き物も飼育していくこととした。その中で、飼育活動における児童の行動を見取っていった。以下、特徴ある4人について述べることにする。

#### ① 捕まえることは好きだが、一人では飼いつけられない児童

A男は、家で金魚を飼っており、春にはハサミムシ、ウスバカゲロウを校庭で見付け、カタツムリを飼った経験を持っている。校庭での生き物探しでは、初めて大きなクモを発見したことに喜びを感じていた。児童の報告に驚き、ほめると、とても満足していた。ただし、虫かごがないので、捕まえずにいた。単元前のアンケートでは、飼ってみたい生き物にスズムシ、捕まえたい生き物にカマキリをあげた。

生き物探しでは、はじめコオロギを見付けていたが、その後大きなクモを見付け、クモとりにも夢中になっていった。前時の興味から「飼ってみたい」という欲求へとなっていった。「飼うのはむずかしいよ。」の声かけに、どうしても飼いたいと訴え、すぐに指導せずに児童の欲求を大切にされた。他に、グループでコオロギ、カマキリを飼い始めた。

毎日休み時間に見ていたが、クモの餌が分からず、キャベツの葉やナスをやっていた。「クモは葉を食べるの。」と聞くと、「そうだよ。」と答えた。一週間後、気が付くと3匹いたクモが2匹逃げってしまったと訴えてきた。「どうしたと思う。」と尋ねると、「フタを開けておいたからだ。」と言っていた。餌が分からず共喰いをさせてしまったようだった。しばらくして友達から「クモはキャベツなんか食べないよ。生きてる虫を食べるんだよ。」と言われ、びっくりしていた。そして飼っていたコオロギを餌にしようとした。一緒に飼っている友達から「コオロギがかわいそうだよ。」と大反対にあい、どうしたらよいか分からなくなり困っていた。「他に餌を探そう。」と励ますとうなずき、図鑑で調べ、ハエを捕まえようとしたがだめであった。

しばらくするとクモが死んでしまい、「クモを飼うのはむずかしいな。」と言いながら、餌が生き物によって違うことに改めて気付いた。「生き物を飼うのをどうしようか。」と聞くと、コオロギを飼うことに集中していった。しかし、餌を持ってくることはなかった。コオロギも死ぬと今度は、ザリガニを飼い始めていたり、まだ生命の大切さには考えがいたらなかった。ザリガニが卵を生むと、かえるのを楽しみにしていた。友達と水替えの時、卵を落とさないように静かにゆっくりと行っていた。

#### ② 捕まえることより飼いつけることが好きな児童

B男は、家では何も飼っていないが、1年生の頃より学級のカタツムリの世話をし続けている。春には、校庭でアオスジアゲハを見付けた。飼ってみたい生き物にスズムシをあげ、捕ま



えたい生き物にもスズムシをあげた。しかし、友達の誘いからカタツムリ・ナメクジグループに入った。

公園では、すぐに日陰のジメジメした場所に行き、目的のナメクジ探しを始めた。探しているうちに、イナゴを見付けると「飼う虫じゃないから、別のグループにあげよう。」とあげてしまった。他にも見付けたが、ナメクジのみをかごに入れて、「目的の虫が見付けられた。」と満足していた。「長く飼うためには、住みかをすぐ作ってやらないとね。」と言い、捕まえた場所の土と草をとり、水槽の中に住みかを作って虫を入れていたのでほめた。

次の日に、「持ってきたキュウリたくさん食べてる。」とびっくりし、毎日餌用のキュウリを持ってきていた。友達が餌をやらないと訴えてくることもあったが、「どうしようか。」と問い直すと、「仕方がないから自分一人でも持ってくる。」と意欲的だった。

カタツムリの世話をするうちに卵を発見し、大喜びで話していた。一緒に喜ぶと、「1年生の時はうまくかえらなかつたから、がんばってかえすぞ。」とはりきりだした。友達が段ボール紙でカタツムリの家を作ってくると、「自分の家じゃないんだから喜ばないよ。」と言い張り、図鑑を持ってきて友達に説明し、板で運動する場所、植木鉢のかけらで住みかを作っていた。卵のあるところは、「赤ちゃんがいるのでさわらないでください。」と紙に書いて貼っていた。

ナメクジとカタツムリを長く飼ううちに、「冬眠させないと。」と言い始め、飼育に詳しい主人さんに冬眠の仕方を教わりに行くなど、とても意欲的に活動していた。

### ③ 世話をしたいが、虫に触れない児童

C子は、家では犬を飼っており、春にはカエルを友達と飼っていた。飼ってみたい生き物には、モルモット、ウサギをあげ、捕まえない生き物はなかった。どうやら家で前から飼いたいという思いがあるようだった。グループでは、アオムシ・チョウグループに入っていた。公園で捕まえた生き物はなく、バッタ・コオロギグループに変わっていった。

飼い始めて一週間後、友達の餌やりの様子を少し離れて見ていた。しばらくすると、友達に言われ、リンゴを持ってきた。しかし、餌の取り替えは友達に頼んでいた。別の男の子がバッタを飼育箱から取り出して頭の上に乗せたり、手の上で遊んでいるのを見ると悲鳴をあげて友達の後ろに隠れていた。励ましたが、とうとう最後まで触れることはできなかった。しかし、昆虫館作りの時は、今までの分を取り戻そうと、模造紙に説明を書いていた。

### ④ 友達と協力して世話をし、変化や成長を楽しみにしている児童

D子は、家では金魚を飼っており、春にはザリガニ、金魚を飼っていた。

アンケートでは、飼ってみたい生き物には、ウサギ、モルモットをあげ、捕まえない生き物にはシャクトリムシをあげた。話し合いの中でアオムシグループに入り、図鑑、ビニール袋、手袋を用意した。手袋について聞いてみると、「虫を捕まえるとき、捕まえやすいから。」と言

っていた。休み時間にプランターの夏ミカンの木や、校庭の大きなミカンの木の下で探していたが、高学年の児童にすっかり捕られてしまったとがっかりしていた。そこで、公園に探しに行った。しかし、そこには柑橘類の樹木がなく、別の場所に行ったグループがアオムシを見つけてきたと不満足な様子だった。そこで、別の場所で探した友達の話をすると、「どこで見つけたの。」とその友達に聞いていた。さっそく12匹捕まえてきた。「よかったね。」と言うと別のグループへも分けて、4匹飼いだめた。

飼いはじめて一週間の間にさっそく餌を調べた。プランターのミカンの鉢は飼育箱に入らないからと言って、図鑑に出ていた通り、ミカンの小枝を水の入ったビンに入れて飼育箱に入れていた。2、3日たつと「葉が枯れてしまい、丸まって食べにくそうだ。」と言っていたが、まだ枝を毎週取り替えていた。毎日たくさん葉を食べて糞をたくさん落とすので、びっくりしていた。「もうすぐ、さなぎになるよ。」と楽しみにしていた。

3週間後、餌をとってくるのが大変と言い出したので、「プランターの鉢に移しても、逃げないよ。」と言うと、安心し、毎日さなぎになる数を数えては、帰りの会で発表していた。

1カ月たった頃、掃除で友達がプランターを動かそうとすると、「ゆっくりね。さなぎが落ちちゃったら死んじゃうからね。」と注文をつけていた。そのうちの1匹がチョウにかえったのを掃除中に見付けると大喜びで皆に紹介していた。

以上紹介した児童以外にも、いろいろな行動、つぶやき、表現がある。教師がその時々の子童の言動に敏感にならなくては変容は見取れないように思われる。そして、援助や助言もその時の児童の活動を広げ、深めるものでなければならぬように思われる。今後も児童の言動を細かく見取り、その中で援助のあり方も考えていきたいと考える。

(文京区立明化小学校 古谷 尚律)

## ・ 虫，虫，虫，また虫

### ——年間を通した生き物と子どもとのかかわり——



今年もアゲハの幼虫を育て  
虫嫌いなのでとても心配  
でした。でも今年も学校の帰りに  
トカゲの幼虫を手でつかまえて  
育てる。飼ってみたいと言っていました。  
又今年の夏休みには  
かぶと虫を飼ってせめしめり  
の幼虫を羽化させたりして  
とても素晴らしい体験や発見をし  
たりしてとても興味を持ち始め  
ました。(保護者の感想より)

## 1. 研究のねらい

生活科では、子どもたちが身近な生き物とかかわる活動を通して、それらの変化や成長の様子に気づき、生き物と親しみを持ち、大切にすることが求められている。これまでの実践の多くは、2～3週間教室などで生き物を飼い、その後自然に返すというような短期的なものである。本研究では、四季を通して子どもが生き物とかかわる活動を通して、子どもたちが生き物とどのようにかかわっていくかを知るとともに、年間を通しての変容を見取っていきたいと考えた。なお生き物は、子どもたちの身近にいる虫を取り上げることにした。

## 2. 研究の内容と方法

(1) 単元名 第2学年 「生き物を育てよう」

(2) 単元の目標

- ・ 身近にいる虫などの生き物に興味・関心を持ち、すすんでそれらを観察したり育てたりする。
- ・ 身近にいる虫などの生き物の変化や成長の様子に気づき、絵や文などでそれらを表現する。
- ・ 身近にいる虫などの生き物を観察したり飼ったりする活動を通して、それらに親しみを持ち、大切にすること。

## (3) 指導計画 (18時間扱い)

( )内数字は授業時間数

単元	活動名	主な活動	留意点	評価
1 生き物を探そう	どんな生き物がいたか知らせ合おう (1)	○地域探検で見つけた生き物について発表する。 ○探したい生き物や、飼ってみたい生き物について話し合う。	・地域探検の活動のスライドを用意しておく。 ・地域にたくさんの生き物が生息していることに気付かせるようにする。	発言内容
	生き物探しの計画を立てよう (1)	○生き物探しに行く計画を立てる。 ・見付ける生き物ごとにグループを作り、探す場所を決める。 ・校外に探しに行くときの約束について話し合う。	・探す生き物は学級で一つに限定しないで、児童に選ばせるようにする。 ・生き物探しは、グループでの活動とする。(有志の保護者に協力を依頼する)	行動観察 計画表
	(5) 生き物を探そう(3)	○集合して、安全についての話や、地域の人たちとの接し方についての話を聞く。 ○計画に従って、グループごとに生き物を探しに行く。 ○帰校の報告をし、生き物の世話をする。 ○気が付いたことや工夫したこと等を学習カードに書く。	・交通事故に気を付けることと、危険な場所に近付かないようにさせる。 ・教師は自転車に乗って児童のグループを回り、援助する。 ・あらかじめ指示して生き物を飼う用意は特にさせておかない。	行動観察 自己評価 学習カード
2 生き物を飼おう	生き物を飼おう(2)	○生き物を教室で飼う。 ・生き物の飼い方を図鑑などで調べる。 ・材料を用意して、生き物の家を作る。	・生き物の生態に合わない家ができたり、食べ物を与えたりしても、すぐに指導しないで、児童の思いや願いをつかむ。	行動観察 作品
	常時活動 (5)	・生き物の世話 ・生き物の観察	・生き物に大きな変化が現れた時に、その内容を取り上げるようにする。	学習カード 行動観察

	<p>生き物の様子をよく見よう (1)</p>	<p>○常時活動の中から生き物の成長や変化の様子を取り上げる。</p> <p>・羽化, 脱皮などの変化</p> <p>○変化や成長の様子を記録する。</p>	<p>・チョウの羽化など, 児童の願いに基づいて自然に返す場面も考えられる。</p>	<p>行動観察</p> <p>作品</p>
	<p>常時活動</p>	<p>・生き物の世話</p> <p>・生き物の観察</p>	<p>・最低2週間程度生き物を飼い続ける。</p>	<p>学習カード</p> <p>行動観察</p>
	<p>生き物を紹介しよう (2)</p>	<p>○自分の生き物を友達に紹介する準備をする。</p> <p>○自分の飼っている生き物を友達に紹介する。</p>	<p>・児童に自由な表現方法を選ばせるようにする。</p>	<p>作品発表</p>
<p>3 夏の準備 (2)</p>	<p>夏休みの準備をしよう (2)</p>	<p>○夏休みの生き物の世話について話し合う。</p> <p>・家に持って帰って飼う。</p> <p>・学校に置いて当番をする。</p> <p>○夏休みの準備をする。</p>	<p>・夏休みの世話の必要感を持たせ, 児童にその方法を考えさせる。</p> <p>・7月中旬に行う。</p>	<p>発言内容</p> <p>行動観察</p>
<p>4 生き物探しに行きたいな (2)</p>	<p>夏休みの生き物探しの様子を発表しよう (2)</p>	<p>○ビデオや写真を見ながら, 夏休みの生き物探しの様子を発表する。</p> <p>○自分たちが生き物探しをしてみたい場所を発表する。</p> <p>○探してみたい場所ごとにグループをつくる。</p>	<p>・夏休み前に, 休み中に生き物探しに行く児童は, その様子を写真等で記録するように話しておく。</p> <p>・教師が生き物探しに行こうと呼びかけるのではなく, 児童の意欲が高まるのを待つ。</p>	<p>発表の様子</p> <p>発言の記録</p>
	<p>計画を立てよう(1)</p>	<p>○生き物探しの計画を立てる。</p> <p>○乗り物に乗って, 生き物を探しに行くに当たって, 解決しなければならない問題点を出し合う。</p>	<p>・計画を立てる視点が分からない児童には, 学校を出発してから帰るまでの順番に問題点を考えさせる。</p>	<p>発言の記録</p>

例				
		①行く日時 ②生き物がたくさんいるか ③生き物にとってよい場所か ④バスや電車は走っているか	⑤料金はいくらか ⑥乗り物の時刻と所要時間 ⑦駅や停留所を降りてからの時間 ⑧乗り物の乗り方	
5 生き物探しの計画を立てよう  (4)	駅や停留所に調べに行く(1)	<input type="checkbox"/> 駅や停留所で調べてくることについて話し合う。 <input type="checkbox"/> 西新井駅と駅前のバス乗り場に調べに行く。	・前時の話し合いに基づいて、調べる視点だけが入ったしおりを用意する。	行動観察 のしおりの記録 自己評価
	生き物がたくさんいるか聞こう (授業外)	<input type="checkbox"/> 他のクラスの友達、高学年のお兄さんやお姉さん、家の人、土手の近くに住んでいる友達などに聞きに行く。	・1学期に行った「大きな船作り」の材料集めの活動を思い出させる。	自己評価 相互評価
	行く場所を決めよう (1)	<input type="checkbox"/> グループごとに調べてきたことを、しおりをもとにして発表する。 <input type="checkbox"/> 行き先について話し合う。	・お互いの発表をよく聞いて行き先を決めるように助言する。	発言内容
	生き物探しの準備をしよう (1)	<input type="checkbox"/> しおりを完成する。 <input type="checkbox"/> 持ち物の用意をする。 <input type="checkbox"/> 活動の約束を決める。		行動観察
6 生き物探しに行こう  (4)	乗り物に乗って生き物探しに行こう (3)	<input type="checkbox"/> グループに分かれて、乗り物に乗る。 <input type="checkbox"/> 下車駅で降りて、集合する活動範囲を決めて、生き物探しをする。	・目的地をあらかじめ教師が実践し、安全を確かめ、諸届けを出しておく。	行動観察 自己評価 相互評価
	心に残ったことを絵や文で表現する (1)	<input type="checkbox"/> 生き物探して心に残ったことを、絵や文など自分たちの好きな方法で表現する。	・乗り物で働く人の様子にも目を向けさせるように助言する。	



資料の一つとなった。

#### イ. 生き物を飼おう、夏の準備をしよう（1学期）

生き物を見付けてきた次の日の朝、「にんじゃグループ」では、カタツムリの数が足りないと大騒ぎをしている。24匹いたはずのカタツムリが数匹しかいなくなっている。子どもたちに聞くと、大きなバケツの中に入れておいたが、ふたをしなかったとのことである。

生き物の世話をする時間を1時間かけた。このグループでは逃げてしまったカタツムリを探しまわった。ロッカーをどかしたり、ストーブの下を探したりして、結局20匹は見付けたが、残りはどうしても見付けることができなかった。この経験から、子どもたちは、「カタツムリは遠くまで歩いて行っちゃう」ことに気付き、必ずふたをするようになった。生活科は、失敗から次のよい活動が生まれることが多い。



アゲハチョウの幼虫を見付けてきた「にんじゃグループ」は、ミカンの木の葉を見付けに毎朝校庭のミカンの木に行く。1週間ほどたった日に、子どもたちがアゲハチョウの幼虫を10匹ほど見付けて持ってくる。また、昨年グレープフルーツの種をまいておき、30cmぐらいに育った植木鉢を校庭に出しておいたところ、更に、10匹ぐらいの幼虫がついてくる。ミカンの木の葉を幼虫が食べる早さに、葉を与えるのが追いつかず、完全に羽化できなかった幼虫もあった。

給食で出されたミカン類の種をプランター等に植えておくと、春から夏にかけて多くのアゲハチョウが幼虫を産みつける。大都会でもこのような環境を用意することにより、子どもたちが生き物にかかわる機会を十分に持つことができる。

バッタを育てているグループでは、どうしても中に入れてある草が乾燥して、バッタが死んでしまいやすい。教科書や図鑑を調べて土のついた草を入れたり、草に水をやったりするが、どうしても乾燥しやすい。子どもたちは草をとりに行くたびに新たにバッタや他の生き物を捕ってくる。このように本能的と言ってよいくらいそのたびに生き物を捕ってくるのには驚きを持った。また、バッタ類の生き物を育てることは子どもの実態から、かなり高度な活動であった。

夏休みを目前にした、夏の間飼っている生き物をどうするかについての話し合いでは、「毎日虫に餌をやりに来る」「家に持って帰る」「草むらに返してやる」などの意見が出された。子どもたちは、話し合いの中で、「夏の間生き物をどうしたらよいか」ということを切実な問題



としてとらえることができない傾向があった。2年生の子どもたちは、明日のことについては具体的なイメージをもって考えることができるが、夏休みという長期間のことについては、十分に見通しがつかないことが分かった。

#### ウ. 生き物探しに行きたいな、計画を立てよう（2学期）

1学期の終わりに、夏休み中に生き物探しをした子どもに、記録をとっておくように投げかけておいたところ、半数の子どもが家族と生き物探しをし、写真や日記などを持参してきた。学級で見合ったところ、もう1回少し遠い所に生き物探しに行きたいという願いが生まれてきた。

そこで行ってみたい場所別にグループを作り、行き方や、虫とりに適した場所かを調べたところ、右の表のようになった。この表をもとにして、行きたい場所を決める話し合いを行った。

◎の数がいちばん多い荒川土手にすぐに決まると担任は考えていた。しかし、表を見ても子どもたちは、◎の数がいちばん多い所ではなく、「行ったことのない所がいい。」「山みたいなどころがある所がいい。」などと言って、簡単には決まらなかった。

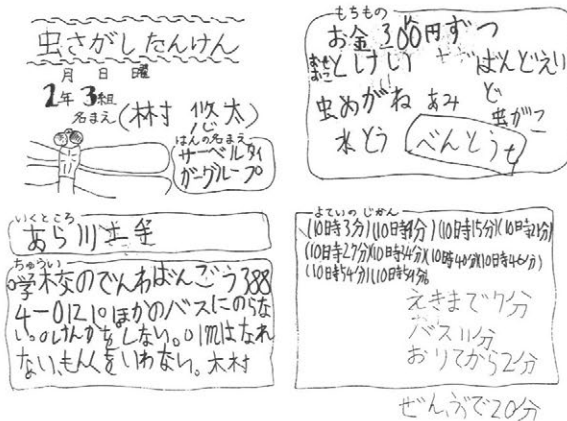
・グループごとに相談して、生き物探しに行く場所を決める

行き先	東綾瀬公園	都市農業公園	五反野親水緑道	荒川土手	元岡江公園
虫が多い所がいい	○	○	○	◎	◎
広い所がいい	○	○	○	◎	◎
危険な所じゃない	◎	◎	◎	○	◎
近いところがいい	△	△	◎	◎	○
網が使える所がいい	◎	◎	◎	◎	◎
安い方がいい	△	○	◎	◎	○
ごみが少ないところがいい	○	○	○	○	○

そこで次の時間に、教師から生き物探しの場所を決めるための次のような条件を出した。

- ・ 80人の子どもがいっしょに行っても、他の人の迷惑にならない所。
- ・ 80人の子どもが何匹かずつ虫を捕っても、たくさん虫のいる所。

以上のような条件を出したところ、子どもたちの話し合いにより、荒川土手に電車で行くことに決まった。生活科では子どもたちの思いや願いを広げていくことは、比較的容易である。しかし、それらの思いや願いを整理し、子どもたちの手で実現できるようにしほっていくことは容易ではない。教師が条件を明確にし、子どもたちに与えていくことが有効であった。



### エ. 生き物探しに行こう, 生き物を育てよう (2学期)

10月の下旬に生き物探しに荒川土手に行くことになった。駅まで整列して行き, 各自が切符を買い, 全員が買い終えたところで電車に乗った。販売機に手が届かない子。60円のボタンが並んで二つあり, どちらを押してよいか分からない子。お金を落としてしまったと思って, グループの友だちから10円ずつ借りる子 (お金はポケットに入っていた) など様々な実際的な問題が起こった。その都度グループで子ども同士話し合いながら解決していくことができた。



生活科の内容の中に駅の働きや, 働いている人々の様子をつかむことがあげられている。本実践では, 乗り物を正しく利用することに重点をおいたため, それらに子どもたちの目が向きにくいという傾向が見られ, 更に工夫が必要であった。

10月の下旬だったため, 荒川土手の草原には虫がもう少ないかと思われたが, 体の大きく成長したバッタ, カマキリ, コオロギなどが数多くいた。また, 今年は雨が多かったせいか, カエルが多数いて, 虫ばかりではなくカエルを捕った子どももいた。

学校に生き物を持ち帰ってから, 生き物の住みかを作り, 飼うことにした。1学期に比べていねいに世話をするようになったが, 冬が近いせいか, 死んでいく生き物が目立った。そこで春から生き物を探している近くの野原に生き物の様子を調べに行った。そこでも夏のころに比べて生き物が減ってきていることに気付く。子どもたちは, 1学期と同じように調べながら



も, また生き物を探し, 捕ってくる。子どもたちにとって, 生き物が減っているかを調べるといよりも, 生き物探しをすることが目的で, その活動の中から付随的に気付いているように思われた。生き物の餌をとりに行ったり虫を捕る, 様子を見に行っても虫を捕る, 休み時間にも虫を捕るという, 虫に明け暮れた1年であった。

(足立区立島根小学校 山田 誠)

## ② 植物とのかかわり

- ・ 朝顔のお父さんやお母さんになろう

——情感を高め、表現力を豊かにする工夫——

「せんせい、ぼくのあかちゃんに、おっぱいをあげてくれたのは、だれですか?」と、りんご病で学校を休んでいるH男からの手紙が届いたのは5月末のことだった。植木鉢の中で、土のふとんに入っている朝顔の種の赤ちゃんに、だれかが、おっぱい(水)をあげてくれたことを聞いて、書いてきた手紙だった。さっそく、

「H男お父さんから、手紙ですよ。H男さんの赤ちゃんに、おっぱいあげてくれた人、だれですかですって!」

と問いかけると、A子が恥ずかしそうに、手を上げた。そんなA子を見付けて、

「A子ちゃん、優しいお母さんだね。よその子にも、おっぱいあげて、えらいなあ。」と、児童の声が響いた。日一日と、朝顔の種の赤ちゃんのお父さん、お母さんが板についてきているようで、なんとも穏やかな児童の心情の育ちである。

### 1 研究のねらい

児童が思いや願い、気付きを生き生きと表現するには、表現したくなるような体験の積み重ねが不可欠である。体験を通して得た感動は、児童の情感を高め、思いや願いをさらに確かに、そして深いものにしていく。この感動に支えられた思いや願いは、児童に「話したい」「書きたい」「伝えたい」「知りたい」という表現意欲を持たせることができる。

本研究では、児童の心情に触れる発問や場の設定をすることにより、児童のアサガオの成長に寄せる情感を高めさせたい。そして、多様な表現(表情、身体表現、絵図・表、言語表現など)を可能とする活動を学習に組み入れ、児童一人一人の表現力をさらに豊かにさせたい。また、児童が自分の持つ表現力を可能な限り発揮できれば、児童間の交流も充実し、相互理解も深まり、アサガオへの親しみも膨らむ。このことは、児童に他の自然事象への興味・関心を促す契機にもなると考えた。

## 2 研究の方法、内容

### (1) 指導の工夫

第1学年「大きく育てよう」の単元における授業を実践し、次の4つの視点から結果を考察する。

- ① 児童の表現意欲を高める指導と援助の工夫
- ② アサガオに児童自らがかわり、世話したいという気持ちを持たせる指導の工夫
- ③ アサガオの成長の変化を見付け、喜びを表現させる工夫
- ④ 児童一人一人の個性に合った表現方法の工夫

### (2) 授業実践

#### ア. 単元の目標

- ・ アサガオを進んで育てる楽しさや喜びを味わい、自然に親しむ。
- ・ 植物の命をかけがえのないものとして実感し、大切にする。
- ・ アサガオの成長を観察し、自分とのかかわりを表現する。

#### イ. 指導計画(15時間扱い)

第1次	アサガオの種の赤ちゃんのお父さんやお母さんになろう。	2時間(5月)
第2次	アサガオの種の赤ちゃんを土のふとんに入れよう。	2時間(5月)
第3次	アサガオの種の赤ちゃんをかわいがろう。	4時間(6～7月)
第4次	大きくなったアサガオの種をほめよう。	1時間(7月)
第5次	アサガオの孫(種)とりをしよう。	3時間(9月)
第6次	アサガオの種の赤ちゃんのアルバムを作ろう。	3時間(10月)

( )内数字は授業時間数

小単元	主な活動	留意点
1 お父さんや お母さん の赤ちゃん になろう	○アサガオの種の赤ちゃんのお父さんやお母さんになって、触れたり、話したりする。  ○アサガオの種の赤ちゃんの顔を書く。	・種への興味・関心を高めるために一人一粒の種を、言葉がけをしながら渡す。 ・児童にとって種が大切なものであると実感させるために、児童より小さくて弱い「赤ちゃん」として擬人化する。  ・記録用紙は、氏名欄・日付欄のみあるものを用意し、児童が自由に
(2)	・記録用紙	

	<p>○アサガオの種の赤ちゃんの名前を考える。</p>	<p>多様な表現ができるものとする。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・名前に込められた児童の思いや願いを、他の児童にも広げる言葉がけをする。</li> </ul>
<p>2 ふとんにアサガオの種を入れよう(種まき)を土の(2)の</p>	<p>○アサガオの種の赤ちゃんが喜ぶような土のふとんを用意する。(土作り)</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・腐葉土、黒土</li> </ul> <p>○個人用鉢に種まきをし、アサガオの種の名札を立てる。</p> <p>○アサガオの種の赤ちゃんの育て方を知る。</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・一人一人に土を作らせることからアサガオの成長への期待をもたせる。</li> <li>・種まきの方法を具体的に説明し、事前に動作化させることで、その方法を確かめさせる。</li> <li>・児童一人一人の種を名前で呼び、児童に手渡すことにより、心情をより高める。</li> <li>・児童が自らかかわるためのきっかけとなるように、児童の発想を生かしながら育て方を示す。</li> </ul>
<p>3 アサガオの種かわいちゃんをろうを(4)</p>	<p>○アサガオの種の赤ちゃんができるようになったことを話す。</p> <p>○アサガオの種の「赤ちゃんカレンダー」に、様子に合わせて自分の名前を色別のカードに書いて貼る。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・発芽して土を持ち上げた状態 (水色)</li> <li>・双葉が出た状態 (黄色)</li> <li>・初めての本葉が出た状態 (黄緑色)</li> </ul> <p>○アサガオの種の赤ちゃんの自慢大会をする。</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・児童が進んでアサガオの観察をするように、気付きの発表の場として、朝・帰りの会を活用する。</li> <li>・児童の発想やつぶやきを取り入れて、情報の交換の場として、「赤ちゃんカレンダー」を掲示する。 発芽「よいしょ」 双葉「きをつけ」「ばんざい」 本葉「? (はてな)」</li> <li>・児童の発言を受けとめ、他に広げる援助を行い、児童間で思いや願い、気付きが表現され、交流が深まるように十分な時間を設定する。(アサガオを見ながらの発表会)</li> </ul>

	<p>○大きくなったアサガオの種の赤ちゃんの自慢大会をする。</p>	<p>・前時と同様に、児童の思いや願い気付きを表現させるのに十分な時間を設定し、児童のアサガオへの心情を深めると共に、児童が話し合えたという満足感が持てるように配慮する。</p>
<p>4 アサガオの種を 大きくした ほめよう (1)</p>	<p>○アサガオの種の赤ちゃんが、もっと大きくなるように支柱を立てて、肥料をやる。  (つぼみと花の観察は夏休みとなる)</p>	<p>・児童の言葉を引用し、双葉、本葉の名称を示す。</p>
<p>5 アサガオの孫とりをしよう (種とり) (3)</p>	<p>○アサガオの種の赤ちゃんの子どもを見に行く。</p> <p>○大きくなったアサガオの絵を書く。</p> <p>○アサガオの種の赤ちゃんの子どもを数える。(種とり) ・校庭で画板を使用した観察・記録活動</p>	<p>・まいた種とできた種の様子や数・葉・茎・花の変化に気付かせるため、触れたり、児童間で比較したりする時間を十分設定する。</p> <p>・児童の表現意欲を持続させ、表現力を発揮させるために、記録用紙を多種類用意し、自由に選ばせたり、貼り合わせせたりする。</p> <p>・記録する時間を十分設定する。</p>
<p>6 アサガオの種を 作る種 の赤ちゃんの (3)</p>	<p>○アサガオの種の赤ちゃんの成長の様子を思い出す。</p> <p>○アサガオの種の赤ちゃんのアルバムを作る。(本作り)</p>	<p>・児童が思い出したところから順にカード化して掲示し、最後に、成長の過程を話し合わせながら並べ直し、整理する。</p> <p>・児童自身とのかかわりを取り入れて本作りをすることから、アサガオへの愛しみを実感させる。</p>

	・児童の表現意欲を持続させ、より個性的な表現力を発揮させるために、児童の発想を生かした記録用紙の貼り合わせを促す。
--	---

### 3 研究の結果

#### (1) 児童の表現意欲を高める指導と援助

##### ① アサガオの種への出会いを大切にす指導の工夫

児童にアサガオの種への興味と関心を持たせ、自分にとって大切なものであることを実感させ、植物への愛しみを育てるために、種との出会いの場を工夫した。

##### ア. 種との出会わせ方

第1小单元「アサガオの種の赤ちゃんのお父さんやお母さんになろう」(第1時)

T:「おとうさん おかあさんに なろう」と板書する。

C:「えっ、だれがなるの?」

C:「子どもはだれ?」

(不安そうに、互いに顔を見合わせる。)

T:「みんな ひとりひとりが、あさがおの たねの あかちゃんの」と板書する。

C:「うん、なる。」

C:「なりたあい。」

C:「育て方、わかんないよう。」

(興奮気味になる。)(互いに嬉しそうに顔を見合わせ、手をつなぎ合う。)

T:「今、みんなの赤ちゃんが生まれます。先生のところに、自分の赤ちゃんを迎えに来て、だっこしてあげてね。お話もしてあげてね。」と一粒ずつ大切に種をとりあげる。

C:(先を競うようにして、種をとりにくる。)

種への愛しみを育てるために、種を擬人化して「赤ちゃん」として扱い、一粒だけ手渡したことから、児童は、それを大切に手の中に包み入れ、席に戻って行った。そして、顔を近づけ、頬ずりしたり、何か小さな声で話しかけたりする児童が多く見られた。

また、途中で種を落としてしまった児童がいたことで、「わあ、S子ちゃんの赤ちゃんが落ちたよう。」「けが、しないかなあ。」「みんなで捜そうよ! 赤ちゃん、赤ちゃん、どこにいるのう?」と、みんなで床にはいつくばって捜した。種を落としたS子は、涙を浮かべながら机の下をのぞきこんでいた。このような児童の様子から、種への愛着と友達を思いやる温かいも

のがうかがえた。

イ. 絵図に表現する意欲の持たせ方

(ア) 記録する必要感を無理なく持たせる援助の工夫

第1小单元「アサガオの種の赤ちゃんのお父さんやお母さんになろう」(第2時)

T:「赤ちゃんをいっぱいかわいがってあげたね。お話もしてあげたね。さあ、お父さんとお母さん! 赤ちゃん、これからどうなってほしいのかな。」

C:「大きくなってほしい。」

C:「土に埋めたい。」

C:「水、あげる。」

C:「お日さまに頼みに行ってくる。」と、立ち上がる。

T:「土の中におねんねさせると、赤ちゃんの顔を見られるかな。」

C:「土、かぶっているから見られないよ。」

C:「赤ちゃん小さいから、わかんなくなる。」

T:「赤ちゃんの顔、覚えていられるかしら?」

C:「忘れちゃうよ。」

C:「絶対、忘れない。」

(互いに、忘れるか忘れないかということについて言い合う。)

C:「じゃ、写真を撮っておけばいいよ。」

C:「でも、カメラ持ってないよ。」と深刻に考え込む。

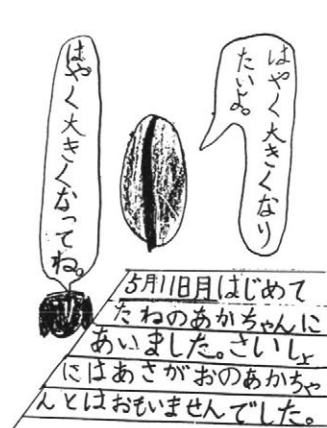
C:「じゃ、お顔の絵でもいいよ。」

C:「うん、それならだいじょうぶ。」と、相談がまとまる。

C:「先生、紙ください。」

児童が、それぞれの力で無理なく表現できるように、氏名欄と月日欄のみ印刷した記録用紙を用意し、絵、文どちらでも自由に記録できるようにしたことで、児童は、種の絵を大きく描いたり、自分の話したことや思いや願いを書いたり、生き生きと活動を始めた。





種の成長を願う表現



種を愛しむ表現

## (イ) 児童の思いを大切にされた種の保管と種の記録のさせ方

第1小单元「アサガオの種の赤ちゃんのお父さんやお母さんになろう」(第2時)

T:「チャイムが鳴りました。残念ですが、赤ちゃんの顔をかくのは、明日、またやりましょう。」

C:「赤ちゃん、どこにしまっておこうか。」

C:「筆箱の中がいいよ。」

C:「小さいからなくなっちゃうよ。」

C:「名前も書けないし、先生に渡したら、だれの子か、わかんなくなるよ。」

C:「セロテープで、お顔の絵の側に貼ろうかな。」

C:「ベタベタしてて、かわいそうだよ。」

C:「そっと貼ろうよ。」

(種をなでて、セロテープでそっと貼る。)(貼りながらつぶやく。)(相談する。)

C:「赤ちゃん、がまんするって言ってるよ。」

(それぞれの種に、顔を寄せて話し込む。)

C:「夜の学校、さみしいだろうな。」

C:「みんな一緒だもん。がんばれるよ。」

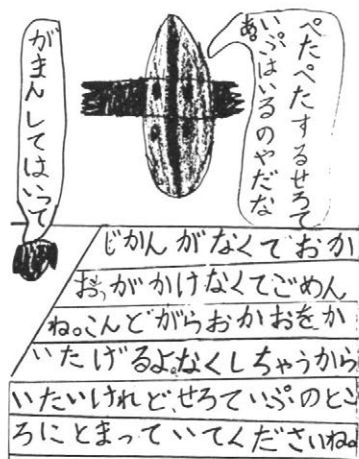
C:「明日、すぐはがしてあげよう。」

C:「先生! 明日、絶対やるよね。」

T:「はいはい。じゃ、明日まで、大切にお預かりします。」

記録が中断されたことから、児童は、種の保管について、自然に相談を始め、活発な意見交換を展開した。このことから、種への心情は高まり、大切にしたいという思いも確かなものになった。さらには、種との再会を待ちのぞむ思いを持たせたことで、記録への意欲の持続もはかれた。

翌日の学習で、児童は、種をより一層大切に扱い、喜んで記録に取り組む姿が見られた。



種を大切にする気持ち

(2) アサガオに児童自らがかわり、世話をしたいという気持ちを持たせる指導の工夫

アサガオに自らかかわった喜びを実感させ、植物の命をかがえのないものとしてとらえさせるために、自ら世話をしたいという気持ちを大切にしたい指導の工夫をした。

① 種への思いや願いを深める工夫

第2小单元「アサガオの種の赤ちゃんを土のふとんに入れよう」(第1時 土作りと種まき)

T:「赤ちゃん、どんな土のふとんに入れてあげたいかな。」

C:「あったかいふとん。」

C:「ふわふわのふとんがいいよ。」

T:(一人一人の児童の鉢に黒土と腐葉土を入れる。)

C:「寝心地よくしよう。」と、土を大切そうにしながらほぐす。

C:(土作りに夢中になる。)

C:「これでだいじょうぶかなあ。」と心配気に友だちの様子を見ながら、土を混ぜる。

T:「さあ、みなさんの赤ちゃんを返しますよ。」

(児童の記録用紙から種を取り外して、一人一人に手渡す。)

C:「S子ちゃん! M子ちゃんが赤ちゃん落としちゃったよ。」

C:「どこ、どこ。」

C:「分からなくなっちゃったよ。」地面に顔を付けて探す。

(どうしても見つからない。)(M子が泣き出す。)(周囲の児童は困り顔になる。)

T:「困ったね。じゃあ、もう一人産みますか?」と、もう一粒の種を渡す。

M子:(慎重に歩いて、鉢のところに座る。)

「土作り」を「種の赤ちゃんのふとん作り」としたことで、種にとって心地よい土を作る意欲が生まれ、種を紛失してしまったハプニングによって、児童の種に対する思いや友達への思いが表出され、心情面の深まりが見られた。

また、その後、「赤ちゃん一人じゃ心配だな。いっぱいじゃ育てられないし、もう一人産みたい。」「一人ぼっちじゃ寂しいもんね。二人なら力を合わせて大きくなるかもしれないよ。」との児童の発言から、一人二粒の種まきとなった。

種を擬人化したことが、土作りに影響を与えていると考える。また、紛失した種を探す児童の姿や児童自身がまく種の数を決めたことから、M子や周囲の児童に、種をより一層大切に扱おうとする態度と自分で責任を持って種の世話をしようとする意欲が育てられつつあると言える。

## ② 水やりの容器の用意のさせ方

### 第2小单元「アサガオの種の赤ちゃんを土のふとんに入れよう」（第2時）

K子：「先生どうやっておっばい（水）あげるの？」と種まきが終わるとすぐに質問する。

T：「おっばいのあげ方は、先生の方がよく知っているので教えようね。でも、おっばいびんも先生が用意するのかな。」

K子「自分の赤ちゃんだから、自分で用意する。」

T：「ねえ、みんな、K子ちゃんえらいよ。赤ちゃんに、おっばいびんを持ってくるんだって。おっばいびんは、割れないものがあるね。ジュースの空き罐でもいいし。」と他の児童にK子の気付きを広める援助をする。

C：「割れると赤ちゃんけがするもんね。じゃ、おっばいびん早く持ってこよう。」

水やりの容器を「おっばいびん」とし、用意できた児童一人一人に教師が記名をしたことで、児童は、自発的に水やりの容器を用意できた。全員の児童が用意するまでは、十日ほど要したが、児童に自ら世話をしたいという思いを持たせるには、児童の主体性を信じて待つことが大切である。

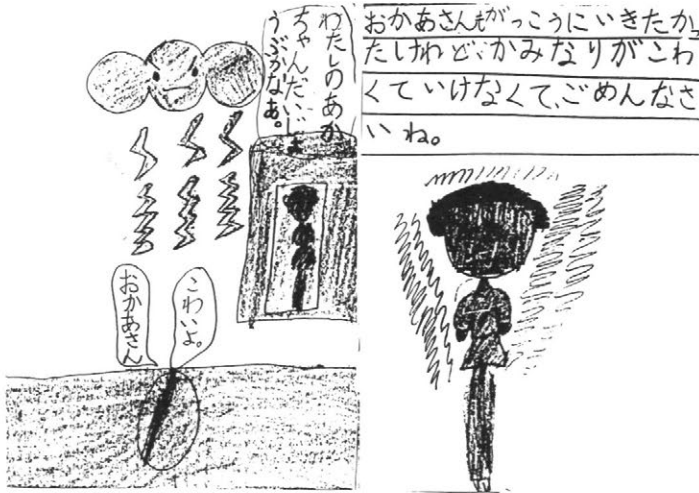
この間、容器を忘れていた児童に、「赤ちゃんかわいそう。明日、持って来てね。」「今日はわたしのおっばいびん、貸してあげるよ。」と言う友達とのかかわりからは、互いを理解しようとする姿がうかがえた。



自ら世話する喜び

数日後、最後に持ってきたS男が、「今日、ぼく、おっぱいびん持ってきたよ。」と嬉しそうに何人もの児童に話しかけていた。

また、水やりでは、容器から水を手の平で受けとめ、指の間から水を流し、優しく鉢の中に水を落とすこと、種への言葉かけ等を児童に促した。



### 種を愛しみ心配する気持ち

#### (3) アサガオの成長の変化を見付け、喜びを表現させる工夫

児童が自らアサガオにかかわり、その成長の変化を見付けることは、育てた喜びを得ることになる。この喜びは、児童の持つ情感をさらに高め、豊かな表現力を身に付けさせるために重要である。そこで、児童が気付いたアサガオの成長の変化を表現させる場を工夫した。

##### ① 情報の広がりを持たせ方

第3小单元「アサガオの種の赤ちゃんをかわいがろう」(第1時 種の赤ちゃんカレンダー)

C：「わたしの赤ちゃん、力持ちだよ。土をおんぶして、よいしょしたよ。」息をはずませて、走り込んできてくる。

C：「Uちゃんの赤ちゃんも、おはようって、顔を出していたよ。」

C：「ぼくの赤ちゃん、どうしたんだろう。」

C：「寝坊の赤ちゃんもいるのかな。」

C：「お話が足りないんじゃないの。」

C：「いつも会いに行ってるのになあ。」 納



発芽のよろこび「よいしょ」

得のいかない様子を見せる。

T:「よしよできた赤ちゃんは、次にどんなことができるのかなあ。ねむねむ赤ちゃんは、いつ起きてくるのかな。先生、知りたいなあ。」

C:「ほくも知りたいよ。」

C:「教えっこしようよ。」

C:「寝坊の赤ちゃんには、他のお父さんやお母さんも、お話した方がいいかもしれない。」

T:「赤ちゃんができるようになったことをみんなにも分かるように、教えっこするために赤ちゃんのカレンダーに書いてみようか。」

C:「だれの子が、どんなことするのかな。」



発芽のよろこび「ばんざい」

「赤ちゃんカレンダー」を作成し、発芽での気付きを一人一人の児童に掲示させたことで、児童は意欲的にアサガオの様子を見に行った。この「赤ちゃんカレンダー」は、気付いた成長の変化を、友達と比較したり、話し合ったりするきっかけにもなり、児童間に情報が広がっていった。

また、種が発芽していない友達を気遣い、励ますという自然な思いやりも見られた。最後になって、やっと発芽したF子のアサガオを見付け、「F子ちゃん、早くカレンダーに貼りに行こうよ。」という児童の言葉から、その興奮が教室に広がった。これらのことから、児童が種の成長の変化を共によるこび、励まし合い、自らかかわって育てた満足感を得ることができたと考える。

けんきな△のあかちゃんだぞ!			
5/21(木) たねまき	6/1(月)	6/12(金)	6/24(水)
5/22(金)	6/2(火)	6/13(土)	6/25(木)
5/23(土)	6/3(水)	6/14(日)	6/26(金)
~~~~~			
5/29(金)	6/9(火)	6/21(日)	<b>木色</b> よいしょ <b>黄色</b> ばんざい <b>黄緑</b> ?(はてな)
5/30(土)	6/10(水)	6/22(月)	
5/31(日)	6/11(木)	6/23(火)	

児童の発想を取り入れた「赤ちゃんカレンダー」

## ② 気付いた成長の変化の話し合わせ方

## 第3小单元「アサガオの種の赤ちゃんをかわいがろう」(第2時 自慢大会)

T:「さあ、みんなの赤ちゃんは、どんなことができるようになったかな。お父さん、お母さんの気持ちを聞かせてもらいたいな。」

C:「勇氣あるんだもん。だって大きいもん。」

C:「早く大きくなったところが見たいな。」

C:「私の子どもは、? (本葉のことを児童は、“? (はてな)” と言う) が大きいよ。」

C:「ばんざいしてる葉っぱ、ツルツル。? (はてな) はザラザラ。」

C:「? (はてな) に毛がある。白と緑だあ。」

C:「がっちゃん (種の名前) の顔にひげがある。4こも? (はてな) があるぞう。」

C:「私のも Y 子ちゃんや K 男ちゃんと同じ! 下の方が赤いわよ。」

C: (それぞれのアサガオをのぞきこむ。) (うなずき合う。)

C:「ばんざいしている葉っぱ、ちょうちょに似てるよ。」

C:「ほんとだ。ほくのもちょうちょだあ。」

児童が、アサガオの成長の変化を十分表現し合う場として、「アサガオの種の赤ちゃんの自慢大会」を学習過程に組み入れた。児童は、自分の思いや願いを深め、多くのことに気付いた。また、校庭での話し合いは、児童に開放感を与え、活発な表現活動が展開された。

児童の気付き (色、形、双葉と本葉の相違など) や表現を基に、「ちょうちょみたいな葉っぱには双葉という名前がついています。ひげのはえている? (はてな) には、本葉という名前がついています。」と説明し、次の自慢大会の予定日を児童に知らせた。

第2回の自慢大会で児童は、「セーターを着せるとあったかくなって、もっと大きくなるかなあ。」「双葉が黄色くなっちゃった。」「本葉のもとの方が白っぽいよ。」「本葉のもとが花になるのかな。」「茎がじょうぶになってる。」「本葉はギザギザ。」と、成長の変化、形、大きさについて多くの気付きを得て、より活発な話し合いになった。

さらには、「手で比べっこしたら、ほくの勝ち!」「たぶん、私より大きくなるんじゃないかな。」との児童の発言からは、アサガオへの親しみの心情の深まりが見られた。



成長の喜びと成長を願う表現

(4) 児童一人一人の個性に合った表現方法の工夫

児童に、自分の思いや願い、気付きを意欲的に表現させるためには、表現したいという児童の気持ちを高め、表現できる内容を充実させることが必要である。そして、児童自身に、自分の思いを最大限に発揮できたという満足感を持たせることが重要である。そこで、児童の個性に対応する表現活動を工夫した。

① 意欲を持たせた観察・記録のさせ方

第5小単元「アサガオの孫(種)とりをしよう」(第1～3時 種とり)

T:「アサガオの赤ちゃんの子どもだから、みんなの孫だね。さあて、何人、孫を持てたかな。」

C:「うわあ、オレのたっちゃん(アサガオの名前)すごくでっかいぞう。」

C:「一つのところに孫がいっぱいだよ。」

C:「赤ちゃんと孫、同じ顔してるよ。」 **十分な時間を設定した上での観察と記録**

C: (夢中でアサガオに触れる。)(友達のものとは比べ合う。)(できた種を数える。)

C:「孫の顔もかいておきたいなあ。先生、紙ちょうだい。」



T:「あら、孫の顔をかきたいの。みなさん、孫の顔をかきたいお父さんがいるみたい。紙はここに置きますよ。」

C:「私もかく。」

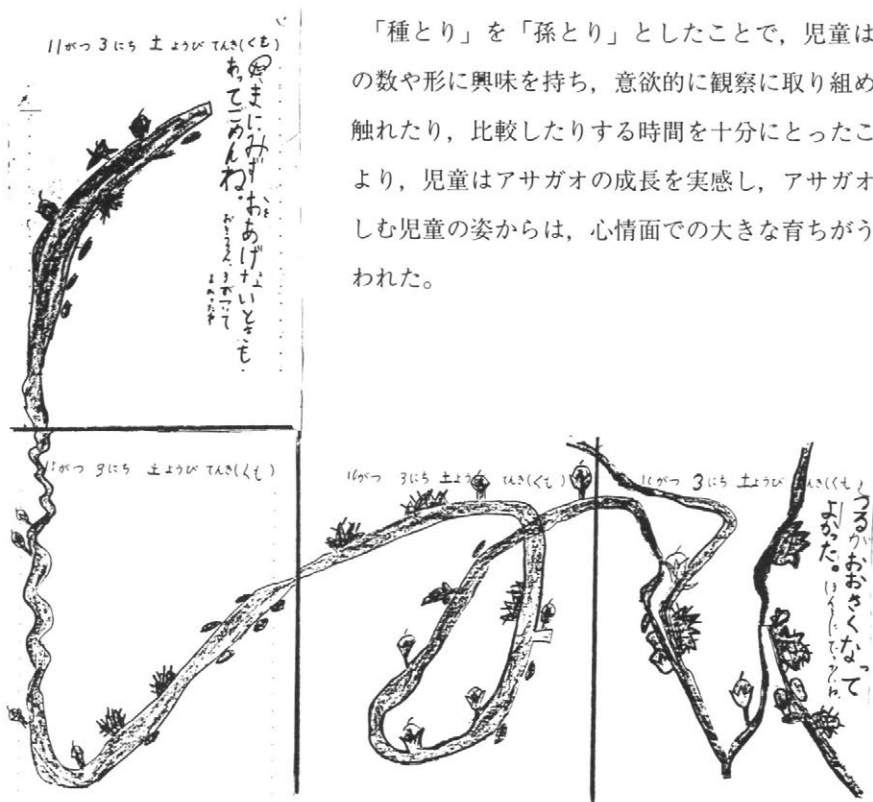
C: (次々に記録用紙を取りにくる。)(夢中でかき始める。)(まきついているつるをほどき、長さをはかる。)

C:「先生、赤ちゃん大きくて、紙、足りないよう。孫の顔も体も、ちょっとしかかけないよ。どうしよう。」

T:「紙ならいっぱいありますよ。アサガオの赤ちゃんの体に合わせて、紙をつなげてみたら。」

C:「あっ、そうかあ。紙をふやせばいいんだ。」

C: (記録用紙を上下左右に貼る。)(夢中になってかき続ける。)



「種とり」を「孫とり」としたことで、児童は、その数や形に興味を持ち、意欲的に観察に取り組めた。触れたり、比較したりする時間を十分にとったことにより、児童はアサガオの成長を実感し、アサガオを愛しむ児童の姿からは、心情面での大きな育ちがうかがわれた。

成長の変化への驚きと喜びは、児童に記録したいという願いを持たせた。児童は、つるや実を記録するうちに、紙面の不足に気付き、困り、考え始めた。記録用紙を付け足すことを助言したことで、児童は、自分のアサガオの大きさや自分のかきたい部分に合わせて、用紙を上下



左右に付け足しながら記録を続けた。このことは、児童のかく意欲を大きくかりたてたことはもとより、かく楽しみも児童に味わさせた。

アサガオの種やつるの様子を何度も見て、何度も触れたことは、児童に表現する内容を持たせ、自分の思いに沿った表現が可能になった。このことが、児童に安心感を与え、さらに確かな、そして豊かな表現活動を促したと考える。また、十分な時間を設定したことが、児童に個性的な表現を引き出し、意欲の持続を図ったと考える。

## ② 児童の特性に合った表現力を伸ばす工夫

児童は、それぞれ得意とする表現方法を持っている。表現方法のうち、「話す」ということは、特に個人差が著しく、苦手意識を減少させるのは難しい。そこで、児童の得意とする表現方法により、個性を尊重し、自信を持たせた上で、他の表現方法を知らせ、より豊かな表現力を育てたいと考えた。

K男は、表情は豊かであるにもかかわらず、いざ話すとなると体はこわばり、立つことさえできなくなる。第1回「アサガオの種の自慢大会（6月）」では、始終、周りの様子をうかがい、自分からの発言はなかった。そこで、「K男ちゃん、お友達の自慢を嬉しそうに聞いていたね。お顔でいっぱい話してくれてありがとう。」と認め、K男の話せなかったという不安を減少させた。

次に、K男の得意とする作文を紹介し、そのよさを児童間に広げようと試みた。

だり	りともほつよ	くもらこいね	すづたおお	あ
いま	おだんく	そいなして	をわかきあ	あ
じす	ばもちと	おくすたそ	もわしなくさ	あ
な	ないつだてと	すばこつかん	ていげしなが	あ
むた	おまくよあも	るいれみよな	くせんも	あ
すか	としげだ	ねすかず	にるたきしての	あ
こし	うたこよるち	るらなこの	かのそまきた	あ
では	さあしよも	ほおあれど	らぶうしまか	あ
すぼ	えぼげいほき	んらはげが	まいたしし	あ
く	にくよまん	とねなるら	こまのたが	あ
の	なはうとと	だぐしかすわ	こみど	あ

アサガオへの思いを書いたK男の作文

自分の得意な作文が認められたことは、K男に大きな自信と喜びを持たせた。そこで、「今度は話したくなったら、話してみようね。そうするとK男ちゃんのことが、もっとお友達に分かってもらえて、仲良しになれるね。」と助言した。

第2回「自慢大会（7月）」で、K男は恥ずかしがりながらも、「はくの本葉はギザギザだ

よ。」「葉っぱの横から、また葉っぱが出た。」「葉っぱが前より大きくなった。」と、自発的に気付きを発表した。

児童の得意とする表現方法を認め、伸ばし、自信を持たせた上でのアサガオとの触れ合いが、K男の表現方法を広げ、その思いや願いを深めさせていったといえよう。

### ③ 感動をもとにした本作りのさせ方

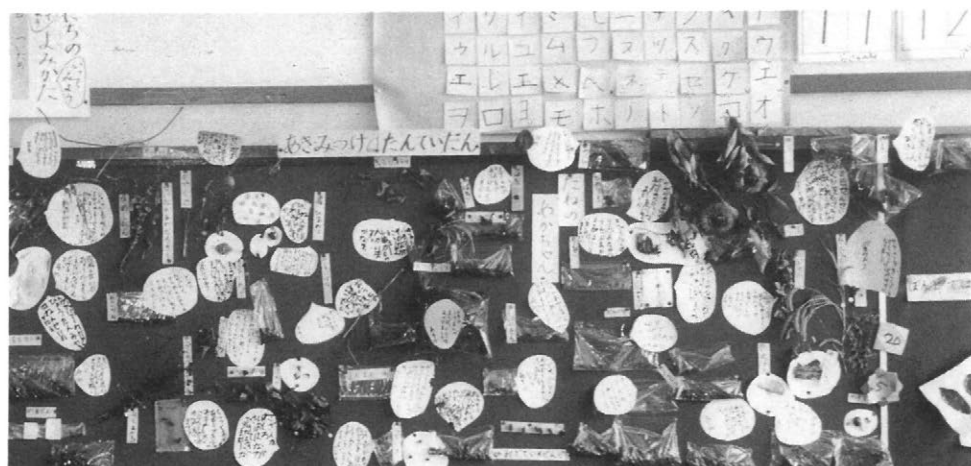
アサガオを育てた体験は、児童にとって自然への親しみと植物の命の大切さを育て、アサガオとかかわった実感が、児童の感動となっていったと考える。そこで、経過に沿ったまとめ方ではなく、児童の持った感動の強い場面から、本作りを開始するように工夫した。

H男は、言語のつながりが不十分で、順を追って話したり、書いたり、作ったりすることがなかなか難しい。また、独特のこだわりがあり、事象を受けとめることも容易ではない。

そこで、H男が一番印象にある場面からアサガオの本作りを始めた。H男は、種とり、開花、本葉、種まきの順にかき始めていった。かき終わるたびに教師に見せにくるH男に、「すごい、孫がいっぱいだね。」「きれいなお花だね。」と、各々賞揚した。そのうち、H男は、友達の本作りを見に行き、「先生、お水あげているところもかこうかな。」と、意欲を見せた。H男の思いのある場面から作り出した本は、友達に刺激されながら、場面を増やしていった。アサガオの成長の経過については、教師が助言しながら最終的に並べていった。

自分のアサガオについて、自分の力で本に完成したことは、H男に大きな喜びを実感させた。このことから、とれた種への愛着をさらに大きくし、その後、意欲的に種探しや秋見つけに取り組んでいった。

児童の持った感動を受け入れ、生かした本作りは、児童一人一人に喜びと成就感を与え、より確かな自然への親しみを育てるきっかけとなった。



児童に自然への親しみを持たせた「あきみつけ たんていだん」

#### 4 研究の考察

- (1) 「アサガオの種の赤ちゃんのお父さんやお母さんになろう」という、種を擬人化した発問は、児童に種との出会いを大切なものとして実感させる上で、大変有効であった。発達段階から見ても、この時期の児童は、イメージの世界にひたまり易いことから、種との一体感がはかれた。また、このことが児童の種への思いを深め、豊かな情感を育むきっかけとなった。

種への思いの高まりは、表現する内容を児童に持たせ、幅広い豊かな表現力の基礎になっていったと考える。

- (2) 児童一人一人に土作りをさせ、水やりの容器の用意を促したことは、アサガオの種は自分にとって大切なものであるということを経験させる上で有効であった。また、全員の容器が揃うのに日数を要したが、児童は種のことを思い、自らかかわり、世話をしようという気持ちを持っていったと考える。

- (3) 自分のアサガオを大切に育てたいという児童の思いや願いをもとにした情報の交換は、児童に表現意欲を持たせることができた。また、表現し合う時間を十分に設定したことは、児童が、互いの共通性や相違性に気づき、活発な話し合いができた。

また、児童が十分表現し合えたという満足感を得たことは、アサガオへの親しみを促し、植物の命をかけたがえのないものとしてとらえる心につながっていったと考える。

- (4) 児童の心情を理解し、児童の発想を生かし、そして、取り入れた教師の援助は、児童の情感を高め、表現力を豊かにする上で、大変重要である。教師自身が柔軟な思考をし、豊かな表現力を発揮することこそ、児童の心情を深める。また、温かさを持った児童理解が児童の意欲と成長を促し、活気のあふれる学習の場を支える。

(足立区立千寿第八小学校 島田 洋子)

・ 花も、はっぱも、ねっこも大好き

——年間を通した児童と植物とのかかわり——



アサガオのかんむり

ビオランテへ

ぬいてごめんね。

ずっとずっと、いっしょ。

しんでもおともだちだよ、ビオランテ。

みみへ

みみ、ごめんね。わたしは、みみをとったり、ほんとうはしたくなかったよ。みみ、だけど、きれいなかんむりができたよ。いっしょにいられるよ。

(——線部分は児童がつけたアサガオの名前)

## 1 研究のねらい

これは、5月から一人一鉢、大切に育てたアサガオの枯れたつるや根を丸ごと全部使ってかんむりを作った時の児童の記録である。台風で倒れ、枯れ果ててしまったアサガオを、児童は自分のものとして最後まで大事にしたい気持ちからていねいに支柱からはずし、土を落としてつるを丸め、リボンで結んでかんむりを作った。児童の文章からは根をぬいた時の心の痛みや、きれいに生まれ変わって一緒にいられるようになった喜びが伝わってくる。

植物は、児童に直接働きかけてくることがないため、興味・関心が薄くなりがちであり、植物も生き物であるという実感が少ない。そこで、「大きく育て、立派な花を咲かせたい」等の願いを持たせ、植物を大切に育てて行く経験を通して、生命あるものだということを実感させていきたい。また、主体的に植物に働きかけ、栽培する楽しさだけでなく、作ったり遊んだりする活動を広げ、材料（花、草、木の実、葉など）を集めたり、遊びや製作を工夫したりする中で、自然に親しむことや活動のおもしろさを味わわせ、植物とのかかわりを深めさせていきたいと考えた。

## 2 研究の内容と方法

### (1) 研究の視点

第1学年「アサガオを育てよう」の単元の指導計画を実践し、さらに年間を通じて植物とのかわりを持っていくことによって深まった、児童と植物とのかわりについて、次の3点から考察する。

#### ① 創意で広がる活動

ア. 植物を素材にした遊びを十分に体験させ、次の活動へ

イ. 個人の遊びから、友達とかがわる遊びへ広げる

#### ② 植物を大切に作る気持ちの育ち方

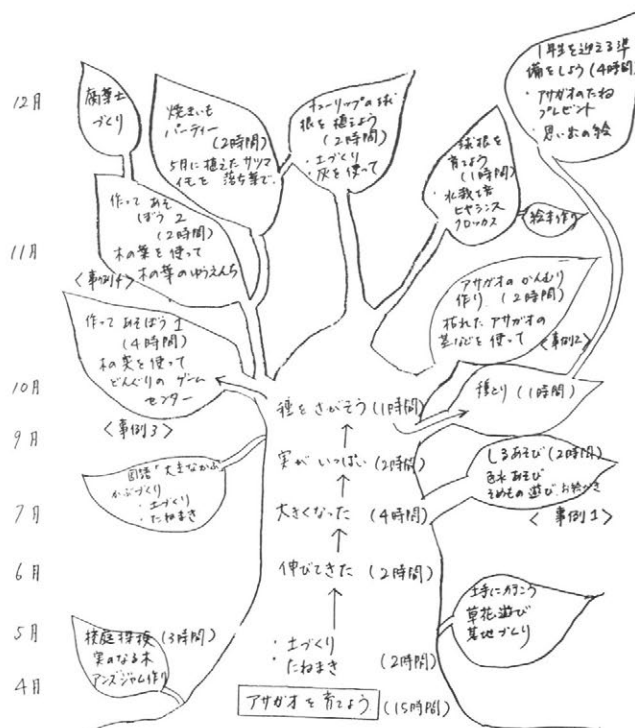
#### ③ 深まる友達とのかかわり

### (2) 授業の実践

#### ① 単元のねらい

- ・ アサガオに親しみを持ち、それを大切に育てようとする。
- ・ 植物を栽培したり、かかわったりする活動を通して、それらは自分たちと同じように生きていることに気付く。

### (3) 植物とのかかわりについての活動の流れ



(4) 植物とのかかわりに関する授業実践(12時間扱い)

( )内数字は授業時間数

活動名	活動の様子	教師の援助
しる遊びをしよう (9月) (2)	◎色水を作って遊ぼう アサガオのしぼんだ花が下に落ちたものを集めビニール袋に入れてつぶすが、色がなかなか出ない。 家から持ってきたバラや、ペゴニアはつぶれにくく、色が出ない。バラの葉もつぶれない。 ヨウシュヤマゴボウ、ツユクサ、オシロイバナは、つぶれやすく、色がきれいに出る。 ・障子紙を折って、染め物をする。 ・絵を描く。	・きれいに咲いたアサガオの花をとるのはかわいそうだ、いやだという気持ちを大切に する。 ・試していく中で、色水が作れる花などに気付くようにする。 ・校庭、土手で材料を集めてもよいことを話す。
アサガオのかんむりを作ろう (10月) (2)う	◎枯れたアサガオをかんむりにしよう 台風でアサガオの鉢が全部倒れてしまい、枯れ果てた姿になってしまった。 種とりをした後、どうしたいかを考えさせる。 根も葉も茎も全てとっておける方法として、茎を丸めてリボンで止めて作るかんむりを紹介する。 ・作って満足している。 ・楽しんで作ったが、根を抜いたことを「ごめんね」と、感じている。	・自分のものとして、大事にとっておきたい気持ちを大切に する。 ・青い種がある、花がさくかもしれない等、様子を見たい児童には無理にすすめない。 ・できたかんむりは、教室に飾り、木の実などを張り付けられるようにする。
作って遊ぼう (10月) (4)	◎秋を見つけたよ どんぐり、椎の実など拾ってくるようになる。 ○木の実のできる遊びについて考え、話し合う。 ○大きな公園に行き、たくさん集めてくる。 ○作って遊ぶ。 ・どんぐりの笛・やじろべえ・車・こま ・けんだま・くびかざり・ブローチ ・まとあて・ころがしゲーム・投げ込みゲーム ○どんぐりのゲームセンターを開こう。 ・ポスター、看板を作ったり、ルールを決めたりする。	・積極的に秋を見付けるように促し、拾ってきたものを掲示する。 ・遊びのアイデアをたくさん出させる。 ・カッター、キリなどの道具については、安全な使い方を指導する。 ・みんなで遊んだり、自分で作ったもので遊んでもらえる方法を考えさせる。

	・お店の人、お客に分かれる。	
作って遊ぼう 2 (11月) (4)	<p>◎葉っぱがいっぱい落ちているよ</p> <p>○校庭や公園の木の变化について話し合う。</p> <p>○木の葉などでできそうな遊びについて話し合い、作品作りや遊びをする。</p> <p>・こすり出し・スタンプ・服・お面・船</p> <p>・くじびき・宝さがし・落ち葉のプール</p> <p>○もっとたくさんの葉を集めての遊びを考える。</p> <p>・落ち葉の家・秘密基地・ふとん・プール</p> <p>・落とし穴</p> <p>○木の葉の遊園地を作ろう。</p> <p>計画を立て、グループで作る。</p> <p>○残った葉で焼きいもパーティをしよう。</p>	<p>・葉は休み時間に集めたり、家の近くや公園で拾ったりしてもよいことを話す。</p> <p>・教室に落ち葉コーナー（常時集めておく）を設置しておく。</p> <p>・たくさんの葉でみんなで遊べないか考えさせ、遊ぶ意欲を持たせる。</p> <p>・自分の役割を把握し、グループに分かれ、力を合わせて活動するように働きかける。</p> <p>・花壇のサツマイモを掘り、焼きいもをする。灰は、肥料になることを伝え、花壇に戻す。</p>

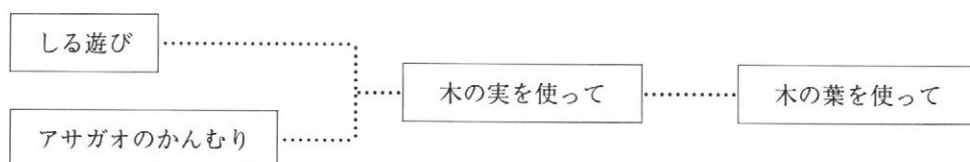
### 3 授業実践と研究の結果

#### (1) 創意で広がる活動

児童の興味を引き付ける遊びや製作を通し、植物に対する親しみを深めさせ、関心・意欲を持たせるようにした。アサガオのしほんだ花などを使った色水遊びや、アサガオの茎、つるで作ったかんむり作りは身近にある素材で遊んだり、遊びに使うものを作ったりすることにつながっていき、活動はどんどん広がっていった。

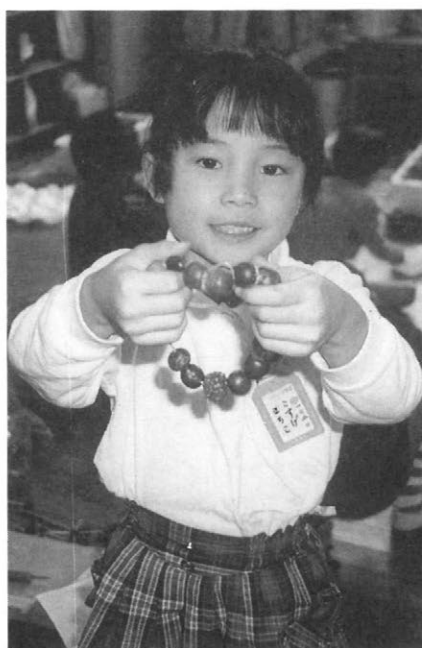
以下、その様子を事例から述べる。

#### ① 植物を素材にした遊びを十分に体験させ、次の活動へ



〈事例1〉「しる遊び」「アサガオのかんむり」の活動から「どんぐりで作って遊ぼう」へ

「しる遊び」や「アサガオのかんむり作り」は、教師の促しで活動が始まったが、これらの活動で植物を素材とした遊びを十分体験したことが次への植物との遊びが広がるきっかけになった。たくさんのどんぐりを拾った児童は、このどんぐりで何か遊べないかと考え、材料を持ち寄り、次々と遊びを作り出していった。転がすなら丸いクヌギが、パチンコのピンはマテバシイ、看板に張り付けるなら椎の実がよいと、児童は工夫しながら木の実に親しんでいった。どんぐりという身近で魅力のある学習材により、また、「遊ぶ」ということを通して、児童は生き生きと意欲にあふれた活動をする事ができた。



どんぐりの首飾り



どんぐりをピンにしたパチンコ

〈事例2〉「どんぐりセンター」から「おちばやしき」へ

木の実と木の葉が落ちる時期は、およそ1カ月ほど違っている。木の実で「どんぐりセンター」というゲームセンターを作り、学年の児童に来てもらって満足していたが、木の葉がたくさん散るようになると、今度は児童は木の葉で遊びたいと言いだした。

「木の葉での遊びは、どんなものがあるだろう」と投げかけると、お面・トランプ・船・うちわ・人形・張り絵・写し絵に始まり、落ち葉のプール・落ち葉の落とし穴・おばけやしき・葉っぱのおうち・秘密基地・トンネルと、ダイナミックなアイデアが出てきた。

葉を集めながら計画書を書き、話し合っていた。そして作り上げた木の葉の遊園地が「おちばやしき」と名付けられた。



### 落ち葉の洋服を作って

10月27日

きょう、ビニールぶくろにいろんな色のおちばをつかって、ふくを作りました。みどりいろやこいちゃいろのはっぱで、ようふくやけんを作りました。こんどは、赤やきいろとか、いろんないろのはっぱをひろっていろんなものを作りたいとおもいます。たとえば、てっぽうやほかのぶきを作りたいとおもいます。考えるといろんなものが作れて大へんおもしろかった。また作りたいとおもいます。

(K男の感想文)



葉っぱの服と葉っぱの剣

K男は、葉っぱの服を着ている者を「勇者」と呼ぶことにして仲間を広げ、「おちばマン」という劇を作り始めた。

#### ② 個人の遊びから、友達とかかわる遊びへ広げる

児童は初め、こまや人形などの小物を作っていたが、次にそれを使って友達と遊び始めた。次第にゲーム性のあるおもちゃを作るようになり、「クラスでゲームセンターを作りたい」という願いから、作りたいものをグループに分かれて作り始めた。

〈どんぐり〉

(個人) 笛、くびかざり、人形、こまなど

↓

(グループ) どんぐりを投げる、転がすなどゲーム的要素のある遊び

↓

(全体) ゲーム屋を集めて、ゲームセンターを開く

バターゴルフ、射的、宝探し、F1カーレース、パチンコボーリングなど、それぞれグループで協力し合い、材料を集めたり工夫したりしながら作っていった。

「1年2組どんぐりセンター」と名付けたゲーム大会では、呼び込みをしたり店番でなくても手伝ったりしている姿が見られた。

〈木の葉〉

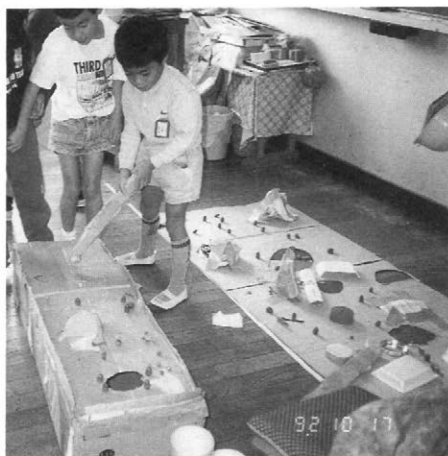
(個人) お面、トランプ、船、張り絵  
など



(グループ) 木の葉のプール、葉っぱのお  
うち、おばけやしきなど



(全体) 木の葉の遊園地を作る



どんぐりのバターゴルフ

木の葉を拾ってきた児童は、数人が張り絵やこすり出しをしていたが、多くの児童はお面や服、船などを作って友達と遊んでいた。それから、「落とし穴を作って友達を落としたい」「大きな葉っぱの家を作って遊びに来てもらいたい」と、すぐにグループを作ったの活動に移っていった。

段ボールなどの材料を放課後集まって商店街にもらいに行く姿も見られた。

10月27日

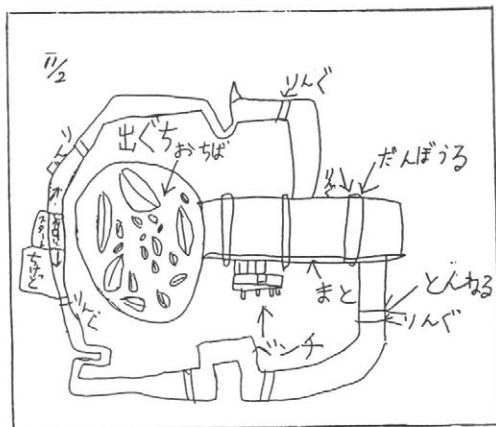
ぼくはきょう、おちばであそびました。そしてダンボールで、トンネルを作りました。りょうめんテープではっぱをはってから、おちばのトンネルを作りました。そして、Oくんたちはプールを作っていました。Oくんが、「プールとトンネルをつなげようよ。」とってつなげました。そして、名まえは「トンネルプール」にしました。こんどは、「トンネルプール」に入口や出口をつけたいです。



「トンネルプール」

上記の文は、T男の感想文である。

この後、もっと大きく、もっと頑丈にしたいという願いから、使えそうなものを探しに学校探検に出かけた。また、迷路のようにしたいという意見が多く出てきて、企画書が提出された。



落ち葉の遊園地「おちばやしき」の

M男の企画書

11月2日

M男の企画書である。木の葉のプールがまん中にあり、まわりを取り囲むように、ダンボールなどで作ったトンネルが迷路のようになっている。これが落ち葉の遊園地「おちばやしき」の原型になった。

(2) 植物を大切にすることの育ち方

草花で遊ぶとき、児童はたくさん手当たり次第に植物をとったりすることがある。遊ぶことに夢中になって、植物が生き物であるということを実感としてとらえていないのである。しかし、アサガオの栽培を通して、植物に親しみを持ち、大切に育てようとする心が育ち、アサガオを使っの製作により、活動を工夫して広げていくきっかけができた。

秋になれば落ちていいるどんぐりも、木の種であることに気付き、大切に使い、木の葉は遊んだ後、焼いもを作るために使い、さらにその灰を肥料にする活動につながっていった。

児童は、自分が植物と深くかかわることによって、植物が自分にとってかけがえのないものであることに気付いていく。かかわりを深める手段として、育てる・作る・遊ぶことを取り入れた結果、体験を通して、植物を最後まで大切にすることの育ちが育っていった。

(3) 深まる友達とのかかわり

① アサガオを育てているときは、自分の鉢と友達鉢を比べて成長の速度を自慢し合ったり、水をやるときに乾いている友達鉢にも水をやったりするかかわり方であった。

(5月)

② しる遊びでは、一人ではいろいろな色の色水が作れないことから、分け合ったり、一緒に花を探しに行く、障子紙の折り方を教え合うなど、新たなかかわりが生まれてきた。

(9月)

枯れたアサガオでのかんむり作りでは、支柱にからみついたつるを一緒にはずしたり、根っこの土を洗い落とし丸めてリボンで止めるのを手伝ったり、協力し合う姿が見られるようになった。

(10月)

③ どんぐりのゲームセンターは板やくぎ、ダンボールなど材料がたくさん必要なことからグ

ループで話し合っ、材料を持ち寄ったり、工夫しながら製作したりする中で、意見の違いからトラブルを起こしたり、お互いを認め合ったりしてかかわりを深めていった。

また、他のグループのゲームで遊ぶことでどんぐりの遊びの多様性に気付いたり、お店とお客になることで、たくさんのお客を呼ぶために呼び込みをしたり、ていねいな説明をしたりするなど、対人関係についても学んでいった。(10月)

- ④ 落ち葉の遊園地「おちばやしき」では、大量の落ち葉を必要とするため、児童は校庭はもとより、木の多い公園やけやき並木に出かけて行き、ポリ袋にいっぱい拾ってくるようになった。その時、まだ葉の落ちていない木に登り、葉をとってこることもあったが、たいさんほくの葉は、いい匂いがすること、落ち葉とそうでない葉の手触り、みずみずしさの違いに気付いていった。

そして、ダイナミックな計画を立て、実行するに当たり、学級が一つとなって取り組むようになっていった。おそろいの落ち葉の洋服を作り、「おちばやしきのうた」を作って歌い、完成させるために皆が熱中して作業を進めていった。そして、完成したときの満足感といよいよ遊ぶという期待感。落ち葉を媒介にして、学級の児童がまとまっていったのである。

(11月)



中にぎっしり落ち葉がつまっている  
「おばけやしき」「おちばおばけ」



上から「落ち葉のシャワー」をふらせる  
木の葉のプール

#### 4 おわりに

年間を通じて、繰り返し植物にかかわっていくことが、植物に親しみを持たせ、自分の生活の中に植物を取り入れていくきっかけを作ることがわかった。

アサガオの種との出会いから、種まき、発芽、日常の世話、そして開花、種とりと触れ合い、かかわる中で成長や変化の不思議さやおもしろさに気付いていく。草花を遊びに使ったり、遊ぶものを作ったりしていく中で、児童は植物の生命にも気付いていくことが分かった。

植物は、直接働きかけてこないだけに、自ら進んで働きかけることが必要である。「～してみたい」という児童の願いを大切にし、その願いを大きく膨らませていくことによって、児童は活動を広げ、植物、自然に親しんでいく。

今後も、児童の願いを見取り、活動を広げ深めるような年間を通した植物とのかかわり方を見直していきたいと考える。

(大田区立嶺町小学校 米澤 理恵子)

## ・ わたしだけの観察記録

### —— 児童の表現の発想に学ぶ観察記録の工夫 ——

まきものを作りました。トウモロコシのまきものを作りました。絵や文しょうをかいたりしました。

とても楽しくておもしろいなと思いました。みんなもとてもうまくできていました。



## 1 研究のねらい

上の写真は、A子がトウモロコシの観察記録をもとに、その成長を振り返ってまとめた作品で、左の文章はそのときの感想である。作品作りをすることによって、植物の成長を楽しく振り返ることができた一例である。

植物を育て、収穫することは、児童の植物への関心を高め、大きな喜びとなる。しかし、植物の成長は栽培の条件に左右されやすく、種類によっても様々である。また、動物に比べ変化の少ない植物は、児童が関心を持続させ、日々その様子を見たりかかわったりすることがなかなか難しい面がある。

そこで、植物への関心を持続させ、書くことを楽しんで続けることが、植物の成長の様子に気付かせることや植物を児童の身近なものとしてとらえることにつながると考えた。

本研究では、単調になりがちな植物の記録のしかたを工夫することによって、児童に植物への関心を持たせ、変化や成長について振り返り、さらに作品作りを通して楽しんで植物とかかわる方法を探ってみた。

## 2 研究の内容と方法

### (1) 研究の視点

第2学年「大きく育てよう」の単元の指導計画で授業を実践し、植物の成長と児童のかかわりについて、次の3点から考察する。

- ① 児童の観察記録のまとめ方
- ② 作品作りと他教科・他単元への影響
- ③ 作品作りから読み取れる児童の心情や気付き

## (2) 授業の実践

## ① 単元の目標

- ・植物を世話し、その成長の様子に関心を持つ。
- ・植物を育てる楽しさや収穫の喜びを味わう。
- ・植物の成長の様子を観察し、絵や文などで表現する。

## ② 指導計画（18時間扱い）

第1次	植えたいものを探そう	1時間（4月）
第2次	大事に育てよう	4時間（5月）
第3次	伸びてきた野菜	2時間（6月）
第4次	大きくなった野菜	2時間（6月～7月）
第5次	とり入れをしよう	1時間（9月）
第6次	育つ様子をまとめよう	1時間（9月）
第7次	秋まきの種をまこう	2時間（10月）
第8次	育つ様子を記録しよう	2時間（10月～11月）
第9次	収穫の会をしよう	1時間（2月）
第10次	記録を作品にしよう	2時間（3月）

（ ）内数字は授業時間数

小単元	主 な 活 動	留 意 点
1 探 そう 植 え た い も の を (1)	○花や野菜などで、育てたいものについて話し合う。 ・トウモロコシ ・ミニトマト ・ナス ・サトイモ ・ヒマワリ ・ピーマン ・スイカ ○種や苗の入手について話し合う。	・春まきの植物、秋まきの植物があることを教える。 ・個人用鉢、花壇、プランターなどを使うことを知らせる。 ・植えたいものの種や苗を家から持ってきて良いことを知らせる。 (1～2種類)
2 大 事 に 育 て よ う (4)	○個人用の鉢にまく種を決め、カードに記入する。 ○畑の土作りをする。 ・腐葉土・黒土入れ・うね作り (サトイモは種芋、キュウリ、スイカ、ナス、ミニトマト、ピーマンは苗を植える)	・児童から希望のあった植物は、できるだけ植えさせる。 ・発芽しない場合もあるので、予備の種を用意しておく。 ・朝や帰りの会などで、気付いたことを知らせ合うようにする。

	<p>○個人用鉢に種まきをし、名札を立てる。</p> <p>○自分や友達の植木鉢を見て回る。</p> <p>○カードに自分の植物の成長を記録する。</p> <p>○畑やプランターの植物についても、記録したい物を選び記録する。</p>	<p>・発芽していない児童に、他の種を用意しておく。(事前に個別に指導しておく)</p> <p>・成長の様子を、最後に物語などでまとめることを知らせる。</p> <p>・この後、カードは随時書けるようにしておく。</p>
3 伸びてきた野菜 (2)	<p>○自分の育てている植物の成長を見る。</p> <p>○必要な世話について話し合う。</p> <p>・草とり・植え替え・支柱立て・追肥</p> <p>○自分の育てている植物に必要な世話を する。</p> <p>○カードに記入する。</p>	<p>・1年生のとき使ったアサガオの支柱があれば利用する。</p> <p>・追肥は、植物の成長に合わせて行うようにさせる。</p> <p>・児童と育てている植物の写真をとる。</p> <p>・実が収穫できるものについて、食べる児童の順番等を話し合っておく。</p>
4 大きくなった野菜 (2)	<p>○自分や友達の植物を見て回り、変化について話し合う。</p> <p>○育てている植物に合わせて世話を する。</p> <p>○畑やプランターの植物の世話を する。</p> <p>○カードに記入する。</p> <p>○夏休みの世話について話し合う。</p> <p>○育てている植物に合わせて世話を する。</p> <p>○畑やプランターの植物の世話を する。</p> <p>○カードに記入する。</p>	<p>・児童と育てている植物の写真をとる。</p> <p>・実が収穫できる物は、順番に食べる。</p> <p>・夏休みの世話について学年会で検討し、保護者会や学年便りなどで家庭に十分連絡しておく。</p>
5 しより入れを (1)	<p>○畑やプランターの植物で、収穫して食べられる物をみんなで楽しく食べる。</p> <p>○カードに記入する。</p>	<p>・収穫量が多いときは、簡単な調理を加えてパーティにしてもよい。</p> <p>・収穫量が少ない場合は、一口ずつ分けて食べる集会にしてもよい。</p>



<p>6 まとめよう 育つ様子を (1)</p>	<p>○育ててきた植物の記録をもとに、変化や成長をまとめる方法話し合う。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・すごろく ・絵巻物 ・のぼし絵</li> <li>・絵本</li> </ul> <p>○自分の好きな方法でまとめる。</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・国語の「順序を考えてお話を作りましょう」と関連させて行う。</li> <li>・国語や図工と合科させて扱う。</li> <li>・児童からアイデアが出ない場合にはまとめる方法をイメージしやすいように、いくつか示す。</li> </ul>
<p>7 まこう 秋まきの種を (2)</p>	<p>○秋まきの植物について話し合う。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・アブラナ ・ダイコン ・コマツナ</li> <li>・カブ</li> </ul> <p>○自分の育てたい植物を決める。</p> <p>○個人用鉢に種まきをし、名札を立てる。</p> <p>○花壇に、種まきをする。</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・1学期に育てたいと希望のあった植物の中から、秋まきが適するものを記録しておき、話題にする。</li> <li>・今回は葉菜類を中心とし、収穫した物を使って食べる集会ができるようにする。</li> <li>・スイセン、ヒヤシンスなど花の球根についてはプランターに植える。</li> </ul>
<p>8 育つ様子を記録しよう (2)</p>	<p>○観察記録のまとめ方と、毎回の記録の仕方について話し合う。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・すごろく(観察するたびに島ができる)</li> <li>・絵巻物(つなげると巻き物になる)</li> <li>・紙芝居(絵は表、説明は裏に書く)</li> <li>・絵本(張り合わせると絵本になる)</li> <li>・立体カード(飛び出すカードになる)</li> <li>・のぼし絵(種からの成長の絵をつなげていく)</li> </ul> <p>○自分の好きなまとめ方を決め、種と種まきの様子を記録する。</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・春まきの植物をすごろくなどにまとめたことを話題にし、これからの観察がそのまま作品作りになるよう工夫させる。</li> <li>・自分のまとめ方に合った記録用紙を選ばせる。</li> <li>・この後の観察記録は常時活動とする。</li> </ul>
<p>9 しよう 収穫の会を (1)</p>	<p>○花壇に育てた野菜を収穫する。</p> <p>○食べられるように水できれいに洗ったり小さく切ったりする。</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・学年全員で食べられる方法話し合っておく。(味噌汁・即席漬け等)</li> <li>・カセットコンロ(ボンベ付きの卓上コンロ)を使うと教室でも安全に調理できる。</li> <li>・火の扱いや味付けの調合は教師が行う。</li> </ul>

	<p>○全員で食べる。(給食時)</p> <p>○感想を話し合う。</p>	<p>・給食の時間に間に合うようにすると食器等の準備もしやすい。</p>
<p>10 しよう 記録 を作品 に (2)</p>	<p>○今までの記録をつなげたり貼ったりして作品にする。</p> <p>・すごろく ・絵巻物 ・紙芝居 ・絵本 ・立体カード ・のぼし絵</p> <p>○できた作品を見せ合い、一緒に遊ぶ。</p>	<p>・すごろくは、模造紙に順番に並べた後、糊付けするようにする。</p> <p>・絵本、立体カードには表紙と裏表紙を付けるようにする。</p> <p>・紙芝居を入れる袋を作らせてもよい。</p>

### 3 研究の結果と考察

#### (1) 観察記録のまとめ方

##### ① 観察カードをもとに作品を作る

春まきの植物の観察カードをもとに、変化や成長をまとめる方法を児童と話し合った。初めは、なかなかアイデアが出なかったが、国語の「絵を見てお話を作る」学習で絵本作りをした経験を思い出し、だんだん発想が広がっていった。

横方向に続いていく「絵巻物」、縦方向に続いていく「のぼし絵」、順に進んでいく「すごろく」のアイデアが出された。その作品例を以下に示す。

##### ・絵巻物

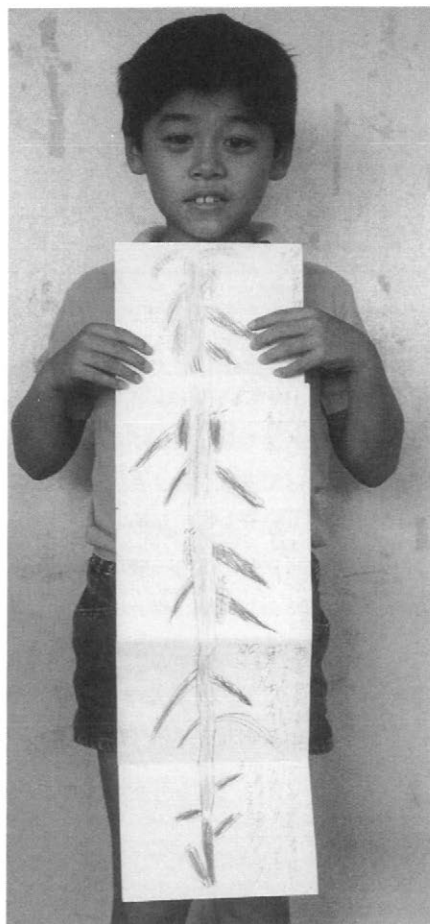
観察したことを横に順に書いていくので、児童には取り組みやすい。(冒頭の写真参照)

##### ・のぼし絵

「のぼし絵」は、児童の名付けた呼び方である。種から順に伸びていく様子を記録カードに描き、再構成する。トウモロコシ、ヒマワリなど上に大きく伸びる植物のまとめに適する。

出来上がった後、たたんでだんだんに広げていくと、植物が伸びていく様子が再現できる。

(右写真参照)

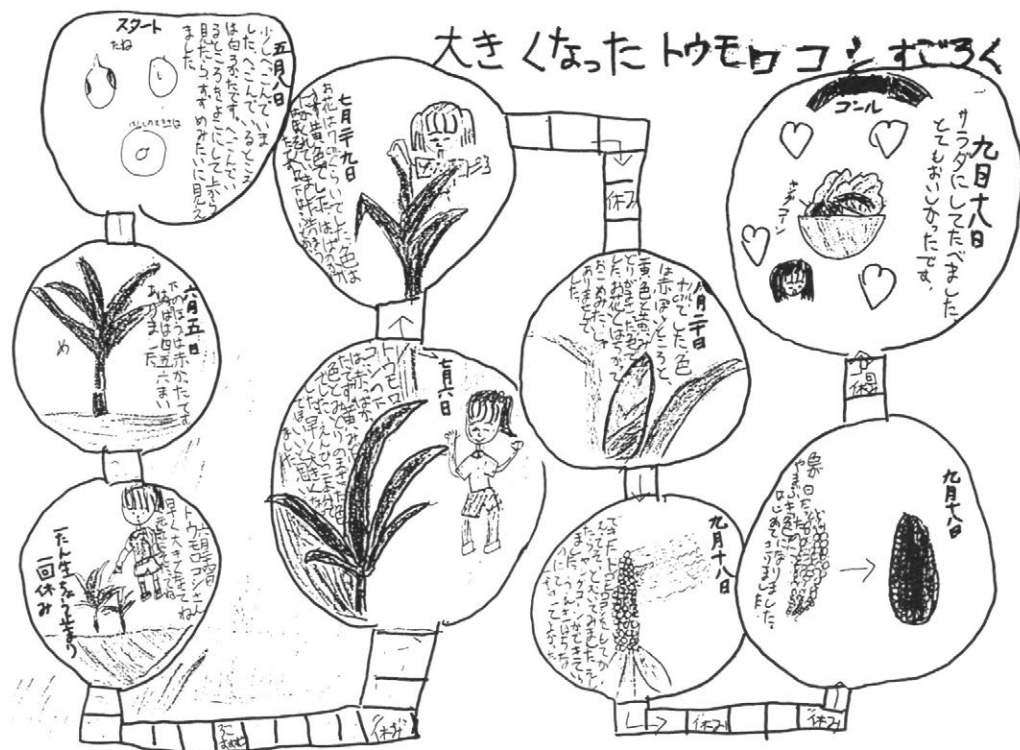


トウモロコシの「のぼし絵」

## ・すごろく

観察カードの内容を丸の中に書き込み、全体がスタートからゴールにつながるようにする。

(下図参照)



観察すごろく

### ② 観察記録をそのまま作品にする

上記の観察したことをもとにした作品作りは、初めての経験でもあり、国語、図工の合科として扱ったが、完成させるのに3～4時間かかった。

秋まきの植物の観察では、作品作りが2度目でもあり、最後に新たに作品を作るのではなく、毎回の観察が作品作りになるように話し合った。友達の作品作りも前回に見ているので、それを参考にして自分自身が工夫したり、改善したりして一層楽しんで取り組むようになった。

そうした児童の工夫や喜びを、作品の例と共に次に示す。

## ・すごろく

観察カードをもとに、1枚の紙の中にすごろくをまとめることは、時間もかかり難しい点がある。毎回の観察を一つの鳥（児童はこう呼んでいる）にすると、最後に模造紙に貼り、つなぐところを書き込むと、大きなすごろくが簡単に出来る。

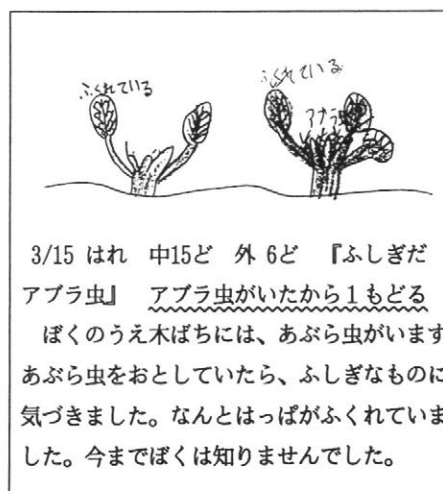
こうした見通しを持つと、児童は観察しながら鳥の形を工夫したり、観察したことを取り入れながらルールを書き入れたりした。

右は、B子の「ダイコンすごろく」である。鳥の形を三角、星型、ハート型などにして、楽しんで記録した。

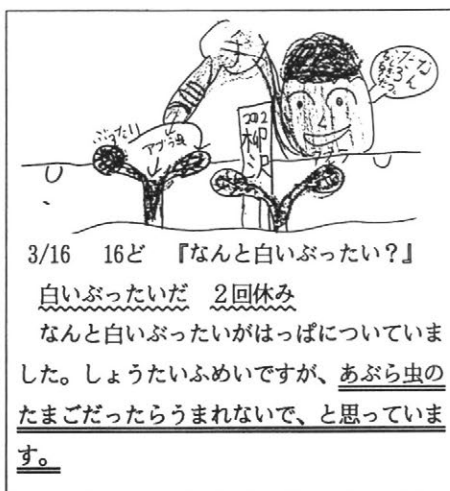


ダイコンすごろく

C男も同様に、コマツナのすごろくを作ったが、以下はその記録の一部である。自分の植木鉢に付いたアブラムシのことをルールにしている。(~~~~線部分) また、アブラムシのためにコマツナの成長に悪い影響が出ることを心配していることが、記録から読み取れる。(==線部分) このように、記録を楽しんで続ける中で、C男は植物を身近に感じていった。



C男の観察記録 3月15日



C男の観察記録 3月16日

・絵巻物

D子は、毎回の観察が自分と植物の物語の1ページであるという見通しを持って取り組んだ。それまで植物の観察が中心であったが、心情面も素直に表現豊かに描かれるようになった。

11/26 (はれ) 17℃  
 めがでていました。  
 またかよかったです。  
 めは出てきました。  
 くまが赤いところもありま  
 した。たねが分れて少  
 が出ていました。かみは四  
 して、めがでてきてかよ  
 かったです。



D子の観察記録 11月26日

3月9日 (晴) 15℃  
 今日見たら、ははのつぼ  
 につぼみがありました。  
 つぼみは、3つありました。  
 17本のうちつぼみが  
 あるのは3本です。  
 前は出てきたのに  
 小さいめが4こ出て  
 ました。



D子の観察記録 3月9日

(2) 作品作りと他教科・他単元への影響

記録をもとにして作品をまとめる経験があると、児童は学習したことを振り返ってまとめることに喜んで取り組むようになった。作品作りの経験をさらに発展させていくことが分かった。

① 国語「たこ作り」(作り方がはっきり分かるように書く)

グループで作ったたこについて、材料や順序を絵入りで分かりやすくまとめた。表紙を付けて絵本にした。以下はその一部分である。

立体たこの作り方

わたしたちのチームは、中のほ  
 おかなくてもよきよき作だこを作  
 りました。

○用いるもの

・セロハンテープ  
 ・はさみ  
 ・たこ糸  
 ・作り方

(1) 三まいのセロハンテープを  
 切りひらく。

(2) セロハンテープで、三まいのたこ糸を  
 ハンターテープで、めがたいする。

(3) たこの間が長方形にな  
 るように、たこ糸をセロハン  
 テープで、めがたいする。

(4) たこの二本も同じように、  
 なるように、セロハンテープで  
 とめる。

(5) 正方形になるように、たこ  
 糸で、たこ糸をハンターテープで、  
 めがたいする。

(6) 中に、たこ糸の、たこ糸を、  
 まけて入れて、とめる。

(7) たこ糸の、たこ糸の、たこ糸の、  
 二本に、一本のたこ糸を、  
 めがたいする。

## ② 「冬の町を調べよう」

右の写真は、冬の町を探検して調べたことを探検すごろくにまとめているところである。

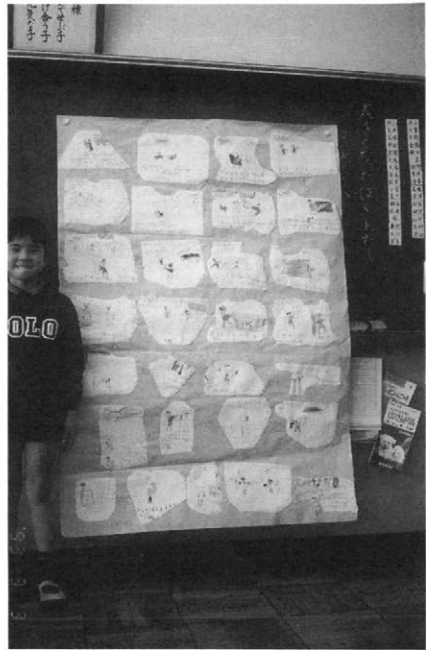
このグループでは、すごろくをどんどん大きくのばしていき、人が立って進むようにした。



冬の町ジャンボすごろく

## ③ 「大きくなったぼく・わたし」

右の写真は、生まれたときから現在までの自分の成長をエピソードごとに書き、最後に大きな模造紙に貼り、すごろくにまとめた例である。



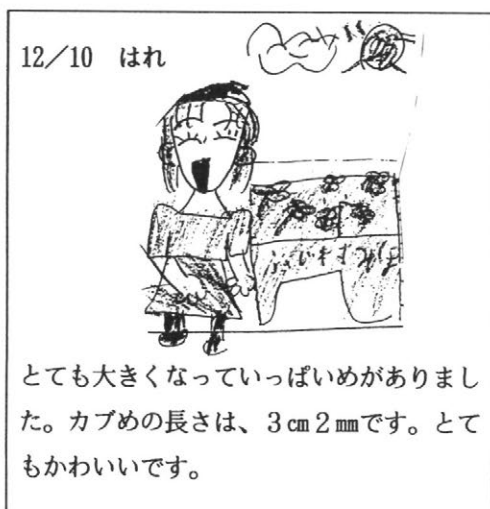
「大きくなったぼく」すごろく

## (3) 作品から読み取れる児童の心情や気持ち

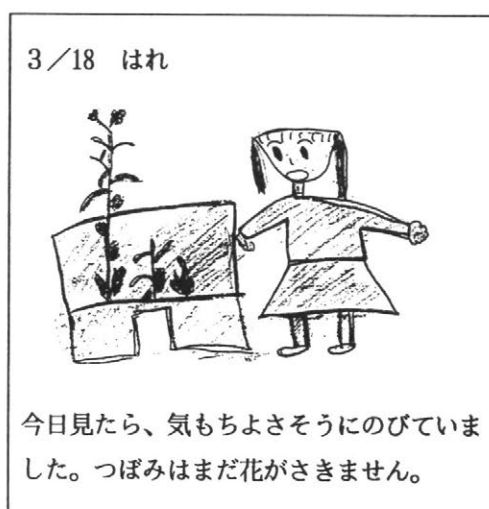
作品作りを見通した秋まきの植物の観察には、児童の心情面がよく表れるようになった。

## ① 自分の気持ちを多く表現するE子

E子は、植物そのものの観察よりも、喜びや驚きなど自分の気持ちを表すことが多い。植物に対しても、「とてもかわいい」「気持ちよさそうにのびている」など、親しみを持って記述している。観察の回数が多くなるにつれ、花のつき方、茎や葉の様子などの描写力にも成長が見られた。



E子の観察記録 12月10日

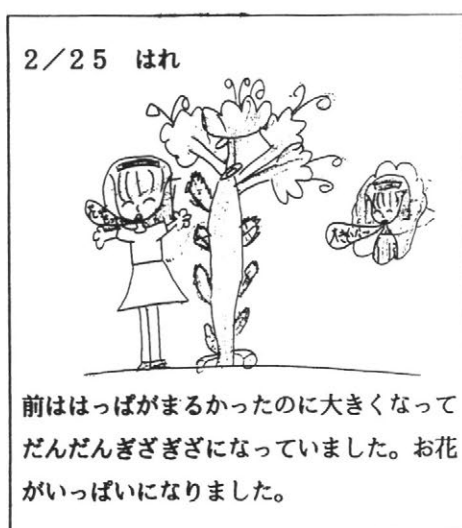


E子の観察記録 3月18日

## ② 関心のあるところを大きく表現するF子

F子は、春まきの植物のまとめで絵本を作ったが、観察記録が少なく、出来上がった絵本も簡単なものだった。秋まきの植物では、より立派な絵本にしようと思いついて観察を続けた。

葉や茎などの細かな観察はあまりしていないが、植物の成長を喜ぶ自分の姿が表現豊かに表されている。自分より花を大きく描き、アブラムシの付いた茎を太く表すなど、関心のあるところを大きく表現している。



F子の観察記録 2月25日



F子の観察記録 3月9日

また、絵本の表紙には、育てたアブラナの種から双葉、本葉、花が咲くに至るまでを絵にまとめ、喜びにあふれた自分を描いている。(下図参照)



F子の絵本の表紙

### ③ 作品作りの感想に表れた児童の心情

秋まきの植物は、毎回の観察が作品作りそのものになっていて、最後の仕上げは切って貼るなど、短時間でできた。作品を仕上げた後の感想には、植物への親しみや、記録することへの楽しさが表れていた。楽しみながら観察したことが植物への関心を高め、かかわりを深めたことが改めて分かった。以下、その例を示す。

ダイコンさんへ

B子

ダイコンさんはすごく大きくなったからかんさつをしてすごろくにまとめました。花がたくさんさいてくれたから、すごろくのしまがとても多くなってとてもうれしいです。

すごろくをやるととても長くできると思います。わたしのよそうでは、20分か30分はかかると思います。4カ月もかけてやったのでしまがたくさんできました。わたしが、あんなにのびるなんて思いませんでした。

わたしはもうちょっとかんさつをしたかったです。わたしはかんさつをやるのが大好きです。

B子にとって、植物の成長に対する喜びは、同時に作品作りの喜びであり、それが充実感となったことが分かる。(＝線部分) また、成長に対する驚き(——線部分)は、作品作りによって、植物への親しみと観察への意欲につながったことが読み取れる。(~~~~線部分)



大きくなったカブくんへ

D子

カブくんは、わたしの親友です。とてもかわいくて、水をあげるとぶらぶらゆれそうになります。花がさくと前よりすごくかわくなります。とてもかわいいです。

そしてしょくぶつのまとめのときわたしは、がんばりました。くふうは、いろいろな形を切ったことです。

D子は、植物に対して親しみを持っかかかってきたことが分かる。(~~~~線部分) 前述のB子と同様に、植物の変化や成長によっていっそう親しみが増し、かかわりを深めたことが読み取れる。また、そのときそのときの気持ちを表現することの重要性をD子の感想から改めて感じた。

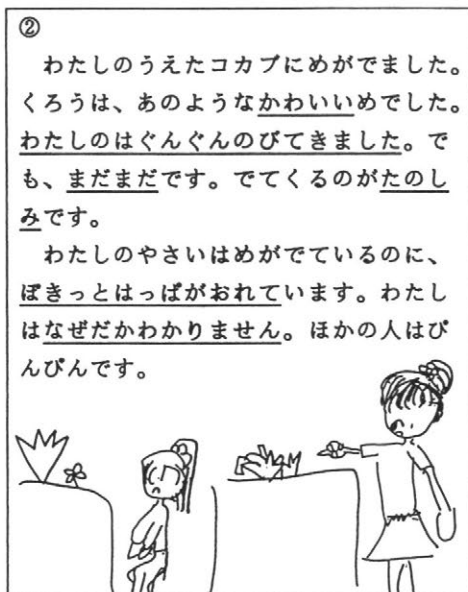
#### 4 まとめ

- (1) 植物の成長はゆっくりで、変化が少なく、児童が関心を持続することはなかなか難しい。しかし、観察記録をもとに作品作りをすることによって、植物の成長を楽しく振り返ることができた。
- (2) 観察記録というと、教師が画一的に記録用紙を与えることが多い。しかし、児童自身の表現の発想を大切にすることによって、観察そのものが作品作りであるという見通しを持たせることができた。それによって、児童が観察を楽しんで続け、植物へのかかわりを深めていくことがわかった。
- (3) 観察をもとにした表現活動をする、児童は他の単元・他の教科においてもその経験を喜んで生かし、発展させていくことが分かった。

(大田区立嶺町小学校 高橋 廣美)

・ ぼくのだいこん，わたしのにんじん

——植物の記録カードから児童の内面を読み取る工夫——



## 1 研究のねらい

①は、A男がトマトの苗を植えたときの記録である。A男はトマトの茎の曲がり、葉の数を数える、背丈を比べるなどトマトを客観的に観点を変えて観察していることが分かる。また、葉の数で年が分かるという思考はA男の個性的なものの見方や考え方である。

②は、B子がコカブを育てている時の記録である。コカブの芽のかわいさや、伸びに対する楽しみを表現し、葉の折れていることを心配している様子がうかがえる。B子の感じ方に心情的な豊かさをとらえることができる。

植物は動物と違って動きが少なく、成長の変化がゆっくりである。児童が植物の成長に興味や関心を持ち、意欲的に世話をしたり、植物を自らの生活に取り入れた活動をしたためには、対象となる植物に十分にかかわることである。また、そのかわりから発見したことや自分の思いや友達とのかかわりを絵図等に表現することにより、心情や気づきが児童自身にも自覚される。さらに、記録に残すことによって、児童は記録を比較し、植物の成長の変化の様子をより明らかにとらえられる。そして教師は、表現された絵図から、児童の気づきや心情の内面をとらえることができる。

本研究は、児童の記録をありのままにとらえ、一人一人の児童が、どのようなことに関心を

持ち、どのような考え方をし、何に気付いているかという観点で分析し、植物とのかかわりについての児童の気付き、心情等の特徴をとらえた。そして、その特徴に対する教師の援助の方向を見出そうとした。

## 2 研究の内容と方法

授業実践をする中で、児童が自分のやり方で記録していったカードをもとに、児童の心情や気付きを読み取り、その児童に対する指導・援助を探っていった。

(1) 単元名 第2学年 「やさいを作ろう」

(2) 単元の目標

- ・ 植物を育てる楽しさや喜びを味わうことができるようにする。
- ・ 植物が元気に育つように、世話の仕方を工夫することができるようにする。
- ・ 世話をするを通して、植物が自分と同じように成長していることに気付くことができるようにする。
- ・ 植物の変化や成長の様子を工夫して記録できるようにする。

(3) 指導計画と授業の実際 (13時間扱い)

○内数字は授業時間数

小単元	活動名	主な活動	留意点
1 野菜の種をまこう ⑥	育てるものを決めよう ①	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 学級園で育てたい野菜を話し合って決める。</li> <li>・ 自分の鉢で育てたい植物を決める。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 1年生で育てた朝顔や落花生のことを思い出させ、何かを育ててみたいという意欲を持たせるようにする。</li> <li>・ 鉢で育てられる植物の種を用意し、児童に選ばせる。</li> </ul>
	種まきをしよう	<ul style="list-style-type: none"> <li>○ミニトマトの苗を植える。</li> <li>・ 学級園を耕す。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 世話をするグループを決定させ、苗を植えさせる。</li> </ul>

### 育てたい野菜を自分で選ぶ児童

児童は第1学年で花を育てた経験に基づいて、第2学年では野菜を作りたいと希望した。希望する野菜は児童によって違う。その違いを受け入れ、鉢で育てられるものを用意した。たくさんの種の中から自分で選ぶことが児童にとっては楽しい様子であった。

友達の種と比べてみたり、種の入っている袋の写真を見たりして、収穫を期待する児童の姿があった。

- |                                                                                                                       |                                                                                      |                                                                  |
|-----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|--------------------------------------------------------------------------------------|------------------------------------------------------------------|
| <ul style="list-style-type: none"> <li>・ミニトマトの<br/>苗植え ①</li> <li>・野菜の種まき<br/>②</li> <li>・さつまいもの<br/>苗植え ②</li> </ul> | <ul style="list-style-type: none"> <li>・苗をグループで植える。</li> <li>・トマトに名前を付ける。</li> </ul> | <ul style="list-style-type: none"> <li>・表示できるものを用意する。</li> </ul> |
|-----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|--------------------------------------------------------------------------------------|------------------------------------------------------------------|

----- 教師の援助と児童の様子 -----

児童が一人一人世話をする植物と、グループで世話をする植物とを用意した。友達と一緒に協力して育てることを経験させ、世話の仕方の工夫に結び付けることができると考えた。児童はトマトに名前を付けることで、親しみを増し、さらに友達との協力する気持ちが高まったようである。

- |                                                                                                                                                                                                         |                                                                                                                                                                                                  |
|---------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|--------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| <ul style="list-style-type: none"> <li>○自分の育てたい植物を植える。</li> <li>・土作りをする。</li> <li>・同じ植物を育てる児童と一緒に種をまく。</li> <li>○サツマイモの苗を植える。</li> <li>・畑を耕す。</li> <li>・苗を植える。</li> <li>・植物を植えたときの様子や気持ちを書く。</li> </ul> | <ul style="list-style-type: none"> <li>・黒土や腐葉土、鶏糞を用意する。</li> <li>・学年で種まきをする。</li> <li>・土をやわらかくするため、畑の土を掘り起こす手伝いを児童にさせる。</li> <li>・苗の植え方を知らせる。</li> <li>・継続観察ができるように児童が望む表現方法で表すようにする。</li> </ul> |
|---------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|--------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|

----- 土作りの児童の様子 -----

土作りは、児童にとって思いがけない経験になった。鶏糞がなぜ栄養になるのか疑問を持ち、「にわたりの糞を野菜が食べて、それをほくが食べるなんて嫌だ」という考えをする児童もいた。

また、畑の土作りでは、バケツを他の教室から借りてきて、手分けをして土をやわらかくした。大変だと言いながらも一緒に育てるといった気持ちを高めた様子であった。

<p>2 野菜を育てよう ②</p>	<p>世話をしよう (常時活動)</p> <p>世話の仕方を調べよう ②</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・学年園はグループごとに水やりをする。</li> <li>・自分の鉢の世話を毎日する。</li> <li>・世話をしてわからないことを話し合う。</li> <li>・調べる方法を話し合う。</li> <li>・実際に世話をする。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・朝や帰りの会で気付いたことを発表させ、興味を持たせる。</li> <li>・図書室の図鑑で調べたり、詳しく知っている人に聞いたりして、解決の方法を工夫させる。</li> </ul>
<p>3 収穫をしよう ⑤</p>	<p>取り入れをしよう ②</p> <p>サツマイモを食べよう ③</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ミニトマトを給食の時間に食べる。</li> <li>・自分の取れた野菜を紹介する。</li> <li>・サツマイモを取り入れる。</li> <li>・サツマイモで何を作るか話し合う。</li> <li>・焼きいも、スイートポテトの準備をし、料理をする。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・家庭に持ち帰って食べ、家の人の感想を聞く。</li> <li>・焼きいも場合は主事さんの協力が得られるように依頼しておく。</li> <li>・スイートポテトの場合は、家庭科の教師の協力を得て安全に作業ができるようにする。</li> </ul>

### 3 研究の結果

#### (1) 記録のとり方の指導

植物の世話は常時活動になっていくため、記録をとることを児童に任せることが多くなっていく。そのため、児童が興味を持って記録できるように工夫をした。

絵本、絵巻物、カード、作文を用意し、児童が最後にどのようにまとめるかを予想して、取り組ませるようにした。さらに、記録を忘れがちな児童のために、記録する時間も授業の合間にとるようにした。

また、記録の形式や内容については、特に規定せず、児童に任せた。しかし、細かく見ていたり、違った視点で記録した児童の記録を紹介するようにした。

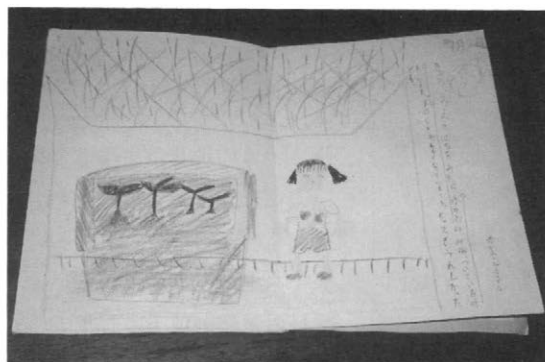
絵本作り…………… 児童は1枚の画用紙を絵と文とで構成していった。変化のあったときに1枚ずつ書き、それを貼り合わせ、絵本にした。出来上がっていく絵本に興味を持った。

絵巻物…………… 絵本と同様に変化のあったときに1枚ずつ書き、それをつなげていった。ど

んどん長くなっていくことに興味を持ち、記録を続けた。

カード…………… 1年間の思い出をつづった「思い出アルバム」作りの一貫としてのカードに絵と文とで書いていった。形式が決まっているので、書く量が少なく、負担にはならなかったようである。

作文…………… これは、児童の希望で出てきたものであるが、主として文を書き、挿絵を入れるようにした。日記風になり、その時の様子が詳しく書かれている。



絵本



カード



絵巻物

## (2) 野菜育ての児童の評価

児童の記録を「関心・意欲・態度」「思考・表現」「気付き」の3観点から見ると、その内容はそれぞれ次のように分けられた。

## ① 「関心・意欲・態度」

- ・育て方……………児童が野菜の世話をしたことについて
- ・期待……………野菜が成長することに対する期待
- ・親しみ……………野菜に対する親しみ
- ・友達とのかかわり……………世話をしていく上での友達との協力の様子や、友達の野菜との成長の比較など

## ② 「思考・表現」

- ・思考……………野菜の世話をしながら疑問に思ったことやその児童の考え方
- ・表現……………野菜の様子をその児童が感じたままに表した表現の言葉や絵

## ③ 「気付き」

- ・対象物への気付き……………自分の育てている野菜の変化や様子についての気付き
- ・他の物への気付き……………育てていく上で出会う土や虫などの対象物以外の物への気付き
- ・自分への気付き……………野菜の世話を通しての自分の行動や感情への気付き

以上の観点で児童の記録を分析してみると、児童により記述に偏りがでてきた。その偏りをその児童の個性、特徴としてとらえた。

以下は、児童の記録の読み取りの実際と分析結果の一部である。

## 〈児童の記録の読み取り〉

J男	ナス	6/1	ほくのうえるたねはナスです。たねをもらった人は田中さん 友達の のうえきばちです。1箱からうえました。ゆびであなをあける とき、にわとりのふんといろいろな土がまざったやつなので きもちわるくなってきました。それと2箱でーばんなのです。に わとりのふんがちよこつとみえたのであまりにわとりのふんが ないところをあなをつきました。
	トマト	6/11	きょう、生活の時間があまったので、トマトを見にいきました。 花がたくさんあって、かぞえてもおぼえられなかったです。 対象 トマトのみが3つもありました。 対象 *実がまだ緑色をしていることを絵にあらわしている。
K男	トマト		ほくはくぼたさんと土やさんでうんでトマトをうめました。 友達の トマトはまだほっぱのままだから、はやくみがいっばいでほ 対象 しいです。でも、トマトはのびるけど、ぜんぜんみはつ 対象 いていません。1日でいっきにぜんおにみがつけばいいとおも 対象 います。ミニトマトかデカトマトはまだわからないけど、ほくは 対象 ミニトマトよりデカトマトのほうがかみからいいです。 対象 トマトがまっかになっていました。このあいだまではグリー 対象 ンのままだつたのに、まっかになったのもうすぐ食べられる 対象 と思います。でもまだ、グリーンのもあります。でもずっとま

\*友達・友達との関わり 期待…成長に対する期待 対象…対象物への気付き  
他…他の物への気付き

## 〈植物の記録の分析〉

児童	関心・意欲・態度				思考・表現		気付き			
	育て方	期待	親しみ	友達	思考	表現	対象物	他の物	自分	
C男	2	5	2	3	8	3	3	2	4	1
D子	7	2	1	3	4	4	2	0	3	8
E男	0	9	2	3	2	0	1	4	5	7
F子	4	4	0	1	3	1	1	0	4	8

上記のように記録を読み取り、分析したところ次のような特徴が見られた。

C男……植物の見方が客観的で、観察力がある。

D子……友達とのかかわりが多く、植物への関心が強い。

E男……植物の世話に自信が持てない。

F子……植物の成長を感情的にとらえる。

#### 4 記録に見られる児童の特徴（タイプ）と援助の方法

##### (1) 植物の見方が客観的で観察力のある児童

C男の記録から

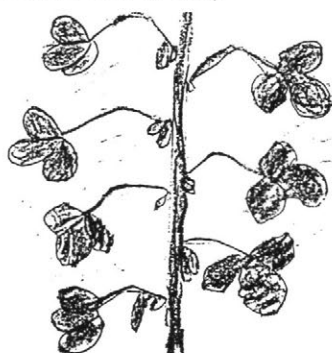
〈トマトのみがなった〉



きょう、トマトをみてみたら、ミニトマト  
ぐらいの大きさのみをつきました。

でも、いろがみどりなので、まだ、たべ  
られません。ほくは、少しずつ水をやって  
いたからだと思いました。

〈えだまめにみがなった〉



きょう、えだまめに、みがなっていました。  
花がかれたところになっていました。  
下の方が実がおおきかったです。

えだまめには、けがいっぱいはえていま  
しました。

(~~~~線は気付き、——線は思考を表す)



この児童は野菜の水やりを忘れずにし、成長の変化の様子を担当にも知らせることの多い児童である。記録は成長の変化に気付いたときにカードに書いていた。この記録を見ると、対象物への気付きが多く、他の児童に比べて思考についての記述も多い。さらに、植物の成長を大きさ、色、枝豆の表面の様子等、いろいろな視点から見ている。このことから、茎の長さを測る、花の様子に目をむける、花や葉、実の数を数えるなど水をやりながら試みていたことが分かる。

この児童の観察の鋭さや観察方法の工夫は、とても良いものである。そこで、学級の他の児童へ紹介することで、この児童は友達に方法を教えるなどの行動の広がりがあった。また、この児童の観察カードへの記述は、植物だけを書いたものが多く、植物とのかかわりを通して、自分へ気付くことが少ない。実際には、植物への関心も高く、かかわりも多いのである。

そこで、自分がどのように植物にかかわっているのかに関心を持たせるためには、カードの絵に自分を登場させるように促すことが考えられる。絵に自分を登場させた時には、植物に対する自分の気持ちや、自分がやったことなどが記述され、自分が主体的に植物にかかわることができると考えた。

(2) 友達とのかかわりが多く、植物への関心が強い児童

D子の記録から

〈わたしの白かぶ〉

きょう、白かぶに水をあげるとき、めが出ていました。みつばのクローバーみたいでした。わたしは、ざっそうがないかしんばいでした。早く白かぶができたらいいなと思いました。

Gさんが言いました。「なにうえたの?」と言いました。「白かぶだよ。」とわたしは答えました。「ほくといっしょだね。」とGさんは言いました。だから、ざっそうができるときすぐぬけるからあんしんです。



(~~~~線は気付き, ——線は思考・表現, =線は関心を表す)

D子はG男とのかかわりを記録（絵本）の中に、生き生きと表現している。友達と一緒に野菜を育てることの楽しさや心強さがうかがえる。また、植物にとって雑草がよくないことを昨年の花を育てる経験から知り、心配している。そして、共に育てる仲間がいることで、雑草をすぐに発見できるという考え方をしている。友達とのかかわりが思考を促し、関心を高めていると考えた。

この児童の記録は、植物の成長に対する期待と友達とのかかわりに関する記述が多い。休み時間に、遊ぶ前に友達と一緒に畑に行き、様子を見たり、水やりをしていた。そして、野菜の変化の様子を担当に報告し、友達にも知らせていた。また、トマトの記録では、自分たちのグループに実ができたことを喜ぶだけでなく、他のグループに実ができていないことを心配する心情も記述している。

これらの記録に見る友達とのかかわりや植物の成長への期待から、この児童の心情の豊かな面を知ることができた。さらに、この児童の友達への働きかけは、他の児童の植物への関心を高めていった。

また、この児童の記録を他の児童の目に触れるようにしたことで、この児童自身の気付きや考えを認めるだけでなく、記述された友達の行動をこの児童を通して認めることになり、児童のよさを広めることになった。

また、D子の素直な表現のよさを記録への寸評で知らせることにより、自信を持たせ、絵本作りへの意欲を高めることになると考えた。

## (2) 植物の世話に自信を持たない児童

### E男の記録から

〈ぼくのなす〉

ぼくのなすのうえきばちに、ありんこぐらいのはっぱがでていました。なすをうえたぼく  
じゃない人もぼくとおなじように、ありんこぐらいのはがでていました。でも、なすじ  
ゃないにんじんとかをうえたN男さんもありんこぐらいのはがでてたと言っていました。  
だから、ちよっぴりがっかりでした。でも、なにかのはっぱはでているんだから、けっこ  
ううれしかったです。

〈なす〉

ぼくは、しよくぶつをだいじにしないほうだったから、なすなんかならないと思ったけ  
ど、いまは、はっぱもすごく大きくなって、花のあとにはほこつとなすがなったのには、さ  
すがのぼくも、すっかりびっくりして、かんしんしてしまいました。

(~~~~線は気付き、——線は思考・表現を表す)

この児童は作文を書くことに興味を持っている。記録をする時になると、意欲的になり、植物を見に行っていた。植物への関心から記録へとつながるより、記録のために植物を見に行くことが多かった。しかし、教師からの働きかけによる観察を重ねていながら、植物への関心が高まっていった。

また、この児童は植物の変化に気付いているが、期待とはずれてしまうことに、「がっかり」する自分の気持ちを記述していることが多い。このことは、あとになって記述された、「ほくは、しょくぶつをだいじにしないほうだった」という言葉に表されているように、植物を育てることに自信がないことの表れだったととらえられる。

植物と自分とのかかわりの中で、自分が世話をしたことや、感じたことへの気付きの記述の中には、心配や期待外れの心情もあること、そして、このような表現には児童自ら気付かずにいる不安（うまく育たないのではないか、枯れてしまうのではないか等）が隠されていることがわかった。

この児童にとって、ナスが実をつけたことは、植物の世話に対して大きな自信をもたらしたと考えられる。植物とのかかわりは、枯らすことなく、最後まで世話をすることができるような援助が大切である。そのためには、植物が育つ環境を作ることを前提として、児童が植物とかわる時間を設定すること、記録する場を確保し、成長の様子に気付き、喜びが持てるようにすることだと考える。

#### (4) 植物の成長を感情的にとらえる児童

##### F子の記録から 〈ナス〉



(~~~~線は気付き、——線は思考、＝線は関心・意欲・態度を表す)

この児童は友達と一緒に水やりをしたり、植物を見に行ったりすることが多かった。植物が成長していく様子を見ているものの、この児童の記録には、「とてもきれいな色」「どんどん大きくなって」というように、感情的にとらえている記述が多い。また、自分への気付きも、「すごい」「びっくりした」などの、感情を記述したものが多い。このようなとらえかたは、この児童にとって植物が身近に感じられることの表れと理解する。

しかし、第2学年として考えると、この児童に対しては、その時の気持ちを認めながらも植物の様子について、もう少し客観的に見る目も養っていく必要があると感じる。そこで、「きれい」と感じたのはどのようなところからか、「大きくなった」と感じたのはどのようなことからかなどの視点を与えるようにすることが有効と考えられる。

教師が児童との会話の中で、児童の話を共感して聞きながら、さらに詳しく見ることができるような聞き方をしていくこと、また、客観的にとらえている児童の記録を紹介することなどにより、見方を広げていけると考える。

## 5 研究のまとめ

この研究から、植物を育てる同じ体験をしても、児童の植物へのかかわり方や見方、考え方が一人一人違い、植物の成長を客観的にとらえる児童や感情的にとらえる児童がいることが分かった。どちらのとらえかたもそれぞれのよさがある。そのよさを認めながらも教師はより広い見方や考え方に気付かせるように働きかけることが大切だと考える。

そのための働きかけには、教師が直接児童を認める、励ます、共感するなどがあるが、児童は友達と一緒に活動する、教え合う、自分と友達と比べて考えるなど、友だちとのかかわり合いの中で、植物を育てることに関心や意欲を持ち、植物への関心がいっそう高まっていくことが分かった。

また、児童の記録を読み取る時には、言葉の裏にある児童の気持ちを理解することが大切であると感じた。そして、児童の気持ちを理解するためには、記録の累積が必要であることが分かった。累積された記録を見ることで、その児童の記述（表現）の傾向をつかみ、心の表れをとらえることができ、援助の方法を探る手がかりとなることが分かった。

(港区立麻布小学校 茂木 三枝)

## VIII 委員名簿

都立教育研究所指導主事	小島 俊子 (研究委員長)
港区立麻布小学校教諭	茂木 三枝 (平成3年度 第1学年担当) (平成4年度 第2学年担当)
江戸川区立下鎌田西小学校教諭	手島 利夫 (平成3年度 第1学年担当)
文京区立明化小学校教諭	古谷 尚律 (平成3年度 第2学年担当)
足立区立島根小学校教諭	山田 誠 (平成3年度 第2学年担当)
足立区立千寿第八小学校教諭	島田 洋子 (平成4年度 第1学年担当)
大田区立嶺町小学校教諭	米澤理恵子 (平成4年度 第1学年担当)
大田区立嶺町小学校教諭	高橋 廣美 (平成4年度 第2学年担当)